

鋼鉄の鼓動は契りて交
わらん（コラボ用）

妖鷲夜雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これ&鋼鉄の咆哮【防空戦艦夜雨】〜夜空の防人と狩人〜

にてお受けした他作者様とのコラボ編が増えそうなのでこちらに移植しました。

基本設定は他作者様や本編と同じですが独自設定やスペック改変、削除などがあります。ご注意ください。

もしも夜雨がほかの世界に飛んでしまったら？

もしも夜雨の世界に誰かが来たら??

もしも〇〇が夜雨世界にいたら??

そんな願いをかなえるべく神様と執筆者は動いた。

神は言っている。新たな小説を書けと。

――

というわけで、ノリ半分勢い半分ネタ半分真面目半分メタ半分の轟沈皆無、日常あり、笑いあり、恋愛あり、主人公補正全員マシマシ、ぶっ壊れ性能の鋼鉄勢ぐらいで書いてます。

基本性能、見た目、サイズそのへんは「wsg2p」（ウォーシップガンナー2ポータブル）基準になります。悪しからず。

各作者様の本編をあらかじめ読んでおくことを強く推奨します。

目次

ジャンクヤード、イベント、その他

恋の鈴は夜に揺れる　　～ Xmas 特別

編　　～　　1

夜の雫に鈴が垂れる　　～ Xmas 特別企

画第二弾　　～　　v e r . 2 . 0 . 1

18

交わる世界　　～ エイプリルフル企画

(笑)　　～　　46

夜に降る恋の雨

コラボ編　　01　　～　　A　　【61cmのロ

マンを語る怪物】　　～　　64

コラボ編　　02　　～　　A　　【Code N

a m e　　～　　87

コラボ編　　03　　～　　A　　【Concept

t)　　～　　102

コラボ編　　04　　～　　A　　【戦術】　　～　　128

コラボ編　　05　　～　　A　　【4人】　　～　　147

ジャンクヤード、イベント、その他

恋の鈴は夜に揺れる 　　Xmas特別編

(艦娘一同集結した大ホールでのクリスマス会)

大淀「と、言うわけでクリスマス会を開催します!」

一度「メリークリスマス!!」クラッカーポーン☆

倭「……」

夜雨「……どうしてこんなにも皆さんのテンション高いんですかね……」チラッ

倭「……」

時雨「僕にもわかんないよ?」

鈴奈(夜雨の後ろにガチ隠れ)「……同じく……ていうか……この人……誰……」↑人

見知り発動中

夜雨「そういえば投稿日時的に倭のことを知らなかったっけ?」

鈴奈「……うん……」

夜雨「CFAさんの所の艦息さん。護衛とか名乗っておきながら61cm砲をバカスカ撃ち込んでくる専守防衛なんて殴り捨てたような人だよ」（という概要で大丈夫だよね……………）

倭「……………」呆れ顔

時雨「……………」（だけど要点は上手くついてる……………）

鈴奈「……………ふーん……………」無関心

夜雨「で、この人見知りの子が鈴奈。過去に色々あつてこうなっちゃったけど、慣れれば大丈夫だから最初だけ多めに見てあげてね」一応紹介

倭（浜風の髪の毛を黒くして伸ばした感じか……………性格は……………潮に近いな……………）「ん？ ああ、よろしく……………」握手

鈴奈「……………あ……………え……………」握手……………

倭「?!」バチツ（静電気）

鈴奈「つ……………」バチツ（静電気）

夜雨「あつちやー……………とても痛そう……………」（他人事）

時雨「うわあ……………」

倭（馬鹿にならない静電気量だぞ今の……………）

鈴奈（……………あつ……………やり過ぎ……………た……………）

鈴奈「……大丈夫……？」オロオロ

倭「問題ない。君も大丈夫k・・・」鈴奈の手を取ろうとして静電気

鈴奈「……っ……」静電気

倭「……夜雨。彼女は静電気体質なのか？」

夜雨「厳密には違うけど今はそうにしといて」慌ててフオロ

倭「ふむ……」

時雨「来ている服に問題はなさそうだし……」鈴奈の服を観察中

倭「体質か……」（本当に体質か……人間にそんな体質なかった気もするが……）

鈴奈の目を見る

鈴奈「……あ……え……う……ごめん……なさい……」視線に耐えられなくなって脱

走

夜雨「あ、まって！」席を立とうとして時雨に肩をひつつかまれて止められる

倭「俺が追う。君等はここに居ろ」ダツシュ

夜雨「はっや……」

時雨「だつてさ。待ってよ？」

夜雨「はあ……時雨ちゃんがまあ……そう言うなら……」

夜雨（鈴奈……大丈夫かな……）

| | | |

鈴奈「……………やっぱり……………怖い……………」全速ダツシユ中

鈴奈「……………流石にここまで走れば……………」後ろ振り返り

倭「止まったか。案外遅かったな」息もあげずに背後にドーン

鈴奈「……………ヒツ……………なんで……………後ろに……………」

倭「……………いきなり走り出したやつを放っておけと？」

鈴奈「……………ついて……………来ない……………で……………」全速ダツシユ再開

倭「あ、コラ……………つたく……………」全速ダツシユ再開

く約30分間全力持久走く

鈴奈「……………ハア……………ハア……………まだ……………来てる……………ハア……………ハア……………」

倭「鈴奈とか言つたな。他人の話はちやんと聞け」

鈴奈「……………なっ……………」(屋根の上に飛び移ろ……………)ジャンプ

鈴奈「あつ」ズルツ

倭「……………(世話が焼ける…………)」地面をけつて鈴奈をキャッチ

鈴奈「……………?」(……………落ちたのに……………痛く……………ない……………?)

倭「……大丈夫か？」 鈴奈をお姫様抱っこ

鈴奈「……うん……………」(……受け止めて……くれたの……う?)

倭「つたく……唐突に走り出すな……夜雨が心配するぞ」

鈴奈「……ごめん……な……さ……い……」

倭「わかればよろしい」

鈴奈「……あの……降ろ……し……て……／＼／＼」

倭「む、そうか」お姫様抱っこから解放

鈴奈「……はあ……／＼／＼」(……なんで……嫌いな……『男』なのに……こんなに……

ドキドキ……) ※男性恐怖症ではなく人見知りです

倭「あ、そういうえば静電気体質だったな……」

鈴奈「……」 俯き気味

倭(予想通り意図的か……)

倭「怒るほどのことでもない。気にする必要もない。とりあえず……」

鈴奈「……」 泣きかけ

倭「……」 優しく抱きしめてみる

鈴奈「……っ」 ビクッ

倭「……すまん」

鈴奈「……ないで」泣きかけ

倭「……？」

鈴奈「……やめ……ない……で……」泣きかけ

倭「……」優しく抱きしめてみる

鈴奈「……」ビクッ

倭「……」優しく頭なでなで

鈴奈「……ッ……ヒック……ン……」泣

倭「……泣きたいだけでなくといい。今は俺以外に泣き声を聞かれることはない」優しくぎゅっ

鈴奈「……ン……」泣

――

倭「……落ち着いたか？」

鈴奈「……ん……」泣きやみました

倭「……」頭わしゃわしゃ

鈴奈「……」ビクッ

倭「……触られるの苦手か？」

鈴奈「……」ギクッ

倭「……馴れ馴れしく触ったのはすまないと思っている」

鈴奈「……」横に軽く首を降る

倭「……そうか」(まるで猫のようだな……)

倭「……」ほっぺむにむに

鈴奈「……？」ちよつとビクッ

倭「なんか飲むか？」

鈴奈「……」頷く

倭「どれにする？」

鈴奈「……」近くの自販機を指差し

倭「……上から2段目、右から……7個めか。了解」↑察した人

鈴奈「……え……」(……何故……わかったの……?)

倭「……」(当たり、か)

倭「……」自販機のボタンポチ

自販機『まいどおー』

倭「……俺は……」

倭はどれにする？▼

【コーヒー】？

コーラ

紅茶

緑茶

牛乳

水

コーンスープ

スポーツ飲料

倭「……何故コマンド？」

そういう仕様だ。

倭「……」(#ω#)

コーヒー

コーラ

紅茶

【緑茶】？ポチッ

牛乳

水

コーンスープ

スポーツ飲料

自販機『まいどお〜またこうてや〜』

倭「……二度と買うか」(#^ω^.) ビキビキ

鈴奈「……」(?ω?) E. あったか紅茶

—— (鈴奈、倭に静電気のこととか自身の過去のことを告げる) ——

倭「……なるほどな。それならさっきの静電気も納得がいく」

鈴奈「……うん……」(……怖いけど……イヤ……じゃない……の……か……な……良

くわかんないや……)

倭「……少なくとも俺はそんなことはしない。祖国から嫌われたものとして約束する。もし君が侮辱されるような事態が発生したら即座にそいつを地獄の冥府行きにしてやるから心配するな」

鈴奈「……そ……ありが……」

チャラ男A「(σ・・π・) σYO!! そののでかいおっぱいの姉ちゃん俺らとちよつとイイことしねえ?」

チャラ男B「(σ・・σ) σYO!! そのダサ男よりも俺らの方がイイだろお?」

チャラ男C「YO! そのダサ男は引つ込んでてYO!」

チャラ男D「へへへ拒否権はないYO!」

チャラ男ボス「フヒヒ……こいつの○○○は美味そうだ」

鈴奈「……」倭にアイコンタクト

倭「……」了解

倭「蛆虫《うじむし》風情が……」チャラ男の顔面に拳がめり込む!

チャラ男Aに150のダメージ! チャラ男Aは気絶した!

鈴奈「……」チャラ男Bを壁に弾き飛ばした!

チャラ男Bに75のダメージ! チャラ男Bは倒れた!

チャラ男C 「このやr……ッ！」

倭 「……喋るな」 チャラ男Cを蹴り飛ばした！

チャラ男に180のダメージ！チャラ男Cは気絶した！

チャラ男D 「雌豚の癖に生イツ……」

鈴奈 「……」 チャラ男Dの胸ぐらを掴んで、腰の入った突きを放った！

チャラ男Dに75のダメージ！チャラ男Dは膝から崩れ落ちた！

チャラ男ボス 「……コイツ、ナカナカヤルネ……」 スタンガンで鈴奈に突きつけた！

鈴奈に効果はなかった！

チャラ男ボス 「なっ……効かないだど?!」

鈴奈 「……50万ボルト……3ミリアンペア……所詮は……その程度……ね……」 カウンターの
大電流

※参考程度に……→の電圧だと革製の服等の分厚い素材でもでも貫通ダメージが発生
します。人間は高電圧には多少耐えられますが、大電流に関しては耐えられません。

倭 「……こんな風に死にたくないならここから立ち去れ」 さっきの自販機を片手で破

碎処理

チャラ男ボス「ぐお・・・」電流ダメージで倭のほうに倒れ掛かる。

倭「…」そのへんにあつた標識を引っこ抜いてホームラン！

チャラ男ボスは空の彼方へと消えた！

倭「……一応聞いておこう。大丈夫か？」手をぼきぼき鳴らす。

鈴奈「……うん……ちよつと……疲れた……」

倭「……せつかく買ったのに冷めてしまったな。買いなおすか？」

鈴奈「……大丈夫……」

倭「……」ベンチに座る

鈴奈「……」隣に座る

倭「……とところで。俺の過去も言うべきか？」

鈴奈「……嫌なら……別に……いい……」

倭「……ふむ。では……」

——（倭、鈴奈に自身が艦だった頃の話をする）——

鈴奈「……」

倭「……」（氣不味くなつてしまった……）

鈴奈「……あ……星が……綺麗……」

倭「む。確かにな」

鈴奈「……」倭に軽く寄りかかってみる

倭「……どうした？冷えたか？」

鈴奈「……ちよつとだけ……ね……」

倭「……とりあえずこれ羽織つとけ。女性が体を冷やすのはよくないからな」E.
自分の着ていたコート手渡し

鈴奈「……ありがと……でもやま……や……やー……やーくん……も……冷えちゃう……から……その……／／／」（……私……何言つて……）

鈴奈「……半分……で……いい……から……さ……／／／」

倭「心配無用だ俺は風邪などどうということはない」

鈴奈「……私が……良くない……あ……その……ごめん……／／／」

倭「……そうか……」（この娘、こんなに推しが強かったっか？）

鈴奈「……はあ……」（……どうしちやっただる私……）

倭「……」鈴奈をちよつと強引ぐらいに抱き寄せ

鈴奈「……え……／／／」

倭「かなり冷えてきた。羽織つて正解だ」2人で羽織り

鈴奈「……うん……………／＼／＼（……あ……え、……うう……………／＼／＼）」

倭「……暖かいな」

鈴奈「……やー……………くん……………こそ……………」（……うう……………それどころじゃない……………私……………
変だよ……………／＼／＼）」

倭「……さつき何か喰らったか？」

鈴奈「……かも……………しれないけど……………／＼／＼」

倭「……とりあえずうちの軍医にみてもらうか」

———

倭軍医妖精「特にこれといった異常はないな」

鈴奈「……良かった……………」

倭「急に来てすまん」

倭軍医妖精「どうってことないさ」

倭軍医妖精「……鈴奈さん、だっけ？」

鈴奈「……はい……………」

倭軍医妖精「……とりあえずまた変なことがあったらいつでもここに来な。いつでも相談に乗るからね。（上手くやりなよ？）」

鈴奈「……ん……………／＼／＼（……やー……………君……………近い……………）」

倭 「顔が赤いが大丈夫か？」 チラ見

倭軍医妖精 「ちよっと暖房が強いようだな。後で下げておくか」

――

倭 「……」

鈴奈 「……」

倭 「……一つ聞くが」

鈴奈 「……ん……？」

倭 「何故俺は全然平気なんだ？人見知りではなかったか？」

鈴奈 「……わかんない……」

倭 「ふむ」

鈴奈 「……うん……」

倭 「ん？」

鈴奈 「……あ……雪……」

倭 「……ん」 上着の予備を鈴奈に手渡し

鈴奈 「……？」

倭 「その恰好では冷えるだけだぞ？そのうち返してくれるなら使うといい」

鈴奈「……ありがと……／＼／＼／＼／」E. 倭の外套（新品の予備）

鈴奈（……やー……くん……なんで……こんな……優しい……の……）

鈴奈（……）チラッ

倭「……」（かなりの降雪量だな……積もるかもしれん……）

鈴奈（……なんか……嫌……じゃない……んだけど……うん……なんて……言え
ば……いい……の……かな……）

倭「……奈」

鈴奈（……うーん……）

倭「鈴奈？」

鈴奈（……）↑気がついてない

倭「おい、鈴奈？」顔のぞき込み

鈴奈「……っ?!」ビクッ

倭「考え事か？」

鈴奈「……なんでも……ない……ていうか……近い……」

倭「おっとこれは失礼した」

鈴奈「……／＼／＼」

倭（……やっぱり女というのはよくわかからん生き物だ） ↑おい

鈴奈「……そろそろ……帰ろ……？」

倭「そうだな。皆に心配をかけるのは得策ではないな」

鈴奈「……ん……」 左手差し出し

倭「……？」 首傾げ

鈴奈「……」 倭の右手ぎゅー

倭「……なんの真似だ？」

鈴奈「……気にしない……で……ね……／＼／＼」 倭右手ぎゅー♪

鈴奈「〜♪」（……）これが……倭軍医妖精さんの……言つてた……恋……ね……（…）

倭（……この行動に意味があるのかわからんなあ……）

この後、二人揃って時雨に説教されましたとき。ちゃんちゃん☆

ーイチャイチャー

鈴奈「……………ん……………」……………私の倭……………取るな……………

倭「……………」さっさと帰りたい……………

時雨「……………」僕の倭を取らないで……………

ーイチャイチャー

……………く、空気が重たい……………。

そうだ。別のところ……………。

(※倭比で)常識と節度が分かっているけどちよつとチャライから偶に損をしている出雲の所ならワンチャンお酒の飲めない私でも……………

ーイチャイチャー

出雲「ほれお二人さん、アーン♡」

隼鷹「あーん♡♡」

飛鷹「あーん♡♡」

※足元に転がる中身の入ってない一升瓶が数本。

ーイチャイチャー

……デスヨネ……。 お付き合いされているという噂は本当だったんですね……。
て、提督さんになにかご指示を貰えばお外に……

ーイチャイチャー

姉 t 「ほら、鹿島。 あーん」

サラトガ「ん～Delicious!とつても美味しいわ!」
アイオワ「でしょ!ガンガン焼くからもっと食べて!」サラトガの口に焼きたての肉
を押し込んでいくスタイル

ーイチヤイチヤー

……おい裏方仕事しろ……。頼る年齢層を間違えた気がします……。もう少し下の
層、駆逐艦辺り……。神風型辺りならこんなことは……

ーイチヤイチャー

松風「龍奈さん、僕が作った料理をちゃんと食べなきゃダメだぞ？ほら、あーん。」顎クイ

龍奈「な、なんで私が……くっ……あ、あーん……／／／／／」

(巻き起こる黄色い声)

ーイチヤイチャー

……そ、そうだった……。松風は例外だから仕方が無いですよ……ね……。

ーイチヤイチャー

嵐「俺が作った料理、食べてくれよな」壁ドン

萩風「あ、嵐？そ、その……あ、あーん……して……？／／／／／」

(巻き起こる黄色い声)

ーイチヤイチヤー

∴。嵐つてこんなに押せ押せキャラだっけ…？

質素儉約がモットーの秋月型なら…

ーイチヤイチヤー

初月「お、美味しい……」

照月「ん、美味しい♡」

秋月「おいひいれす♡お酒にとってもあいますね♪」

涼月「とても美味しいです。ぜひ今度教えて下さい！」

→姉妹愛の塊状態

風「(……)ドヤア。任せろ〜バリバリ〜♪」↑餌付け中

ーイチヤイチャー

……ダメだ……秋月型は酔っ払っている……。
そ、そうだ、睦月型、睦月型なら……。

ーイチヤイチャー

如月「うふふく口移しができないのかしらあ〜？」
睦月「もう、お腹いっぱいでもりにやしい……」
皐月「ボクが食べるよ。はむっ。うん、美味しい」

ーイチヤイチャー

……（。）なんてこつたい……
……な、なら……真面目な朝潮型なら大丈夫で……

ーイチャイチャー

荒潮「あらあらく口移しが（以下略）」

陸奥「あらあらく」

長門^{ながもん}「ほうら、高い？ーい」

ーイチャイチャー

おい長門…。

orz……どうしてこうなった……。
（なにかがクリティカルヒットした音）

夜雨「……グフツウ………とりあえずここから離れよう……。とりあえず人が少ないところで……」

「…鎮守府のどこに行っても（夕張や明石などに毒されたという意味で）やばい奴かカッブルしかいない…。というか、もう自室に籠るしかないのかな…。はあ…。」

夕焼け空の砂浜を歩きながらせてまとも…一般常識レベルで考えてまともな人がどこにいるのか？と考えていた。さつきまでいた執務室はもちろん、工廠、宿舎、寮、居酒屋ほうしょううよしうほ、食堂、間宮、露天風呂、入渠ドック、展望台、灯台、波止場、その他もろもろ…どこに行っても回避ができなかった。なんと…S A N値と体力と気力をこっそり削られた上にフアンブル行動失敗した気がする…。

——とりあえず自室に帰って寝よう。寝られなくても可能な限り休んで気力と体力を…

『あ、自室もやばいことになっていたよwwwwwwカオス&カオスwwww』

——うっそだろおい…。…野宿不可避ですか…。

『ドンマイ☆』

——……そういえば今の声誰だろ…？え、待って、誰？

鈴奈「…」ぷいつ…（左腕ホールド

——…なんですか。イチヤイチヤしてるのを見せているんですか。なんなんですか…。

倭「…用がないなら呼び止めるな。…つたく…。」

チャリーン…かんからりん…

…。え？倭、何か落としたよ。

落としたものを拾おうと落としたものに手を伸ばした。

拾ったもの。指輪みたいなもの。何だろうこれ…。

——自分の手が変な感じ…いや、世界がゆがんで…あれ…？

喪失感、劣等感。

その二つがどこからともなく押し寄せてきた。

指輪を誰かから…いやだ…絶対嫌…

—— どうしたらいいの。わからない。とにかく逃げ出したい。

私は走った。どこに行くという当てもなくとにかく走った。この不愉快な気持ちから逃げたくてひたすらに走った。

そして何かにつつかって一方的に私は吹っ飛ばされた。

衝突の鈍痛と胸の中の鈍痛。この二つの鈍痛に私の意識が包み込まれた。

倭Side

……わからん。あいつのした行動がわからん。……女ってさっぱりわからん。呼びつけるだけ呼びつけておいてあの行動はなんだ……（イライラ）

何がしたい………つ。……

??? 『あーあー、やっちまいましたねえww』

まーたてめえの仕業か。

??? 『せつかくお前の本心読み取ってよんでやったのにww勿体無いねえww両手に花なのになーだ口説きに行きますんかアアww』

うっせ。俺はなにもしてない。勝手に寄ってくるだけだ。

??? 『素直じゃないねえ全く。ほれ、二人も心配してるから相手してやりなwwwwww
じゃあなwwww』

時雨「……？」

鈴奈「……？」

………つたく。

——懐かしい歌が聞こえる。誰の歌だろう。思い出そうと必死に曲を聴くが、歌詞が聞き取れない。でも懐かしい曲ということは本能的に体が理解している。でも、思い出すことができない。

——とても暖かい、そして優しい曲…。

その歌が急に終わった。否、誰かが私に気が付いて近づいてくるようだ。

『あなたは…何を望みますか…？』

とてもやさしい声だった。

——何を…？

『…あなたが望む物…事…です。』

二本の腕が私を包み込む。優しく温かい、干したての布団の香りと芝生の香りがした。

——私が望むもの………望んでること………わからない

……………。

『……………そう。貴女の心は、彼彼に認めてほしい……………傍にいさせて欲しい……………少しだけ甘えさせてほしい……………大好き……………って言ってるわよ?』

————…っ……………// // //

耳元で……………耳の後ろで囁かれて心臓の鼓動が加速する。

『凶星だから正解ね……………うふふ。……………でも、今の貴女は彼に並ぶどころか足元にも及ばないわよ?それでもいいのかしら?』

————…ですよね……………はあ……………。

『……………そうやってすぐ諦めるのは良くないわよ?サッカーで相手のゴールキーパーが居たらシュートをうたないの?』

————………………ポケモ○で相手のポケ○ンにモ○スターボールを投げたらダメなの

と同じでは……？

『ほら、そうやって言い訳して自分に嘘をついて……諦めちゃっていいの？』

——し、仕方ないじゃないですか！だって倭には……

指輪を交換する関係の人が……

『本人は付き合ってるとは一言も言っていないですし、彼女や嫁とも言っていないですよね？』

——……そ、そうだけでも事実上……。

『……そうかしら？……話を交えるけど、貴女はこつちの世界では艦娘と同じ軍艦娘籍

になっっているわ。』

——…全く関係の無い話ですよね？

『関係しか無いわよ？重婚OKだし多少やばい事をしててもOKってことだしね。』

——…でもあのカタブツを……料理は倭の方が美味しい……家事炊事全般自力でこなしちゃうし……色仕掛けしようにも私のじゃ……ね………はあ………。

『……なら、一つだけアドバイスを。他の子は龍奈と凧沙の二人を除けばほぼ『オリジナル』……自然発生型^ドの艦派生の個体か人間を辞めた強化個体、もしくは完全調整個体よ。貴女は根っからの人間。……貴女は貴女らしくアップローチして行ったらいいわ。……それと、一つ忠告。今の倭は人間不信よ。……でも、貴女なら出来るわ。だって私の………』

！！！！！！！

鳳翔「……………起きました……………」

……………希望を持たせて絶望に落とすのは……………ずるいよ……………。はあ……………つて、ここは……………。

数回見た事のある天井。毎回ここに来る時は気絶か眠るかして……………鳳翔さんの所の居酒屋……………の、奥の間。

鳳翔「……………せめて前方は確認してください。私で無ければ吹き飛んでましたよ……………。あと、お酒は程々に……………一応未成年なんですから……………艦娘に法という概念は無いですけどね。」

鳳翔さんに膝枕されるのはこれで何回目だろう……………。もう両手じゃ足りな……………いや、2進数的にはまだ足りてるからセーフ（

……………はい。すいませんでした……………あれ、私お酒飲んだっけ……………？

鳳翔「……………そうね。貴女、手先は器用かしら？」

「そこそこ……………やった事がないこと以外はそれなりに……………」

鳳翔「……………なら、これを使ってみては？」つ耳かき棒（竹）／耳かき棒（金属）／綿棒／ピンセット／粘着綿棒／散香水（※香水の一種）／耳垢水

「……………はい？」

……………え、これで倭に耳かきをしろってこと……………ですよね？

鳳翔「……………耳かき。……………出来るかしら？」

「……………他人にはやった事ないです。」

……………そういう自分もされた事ないんですけどね。

鳳翔「……………そう、なら頑張つて使えるようになってくださいね。……………あの人^{提督}みたいに不器用で無ければ大丈夫よ。」

「……………はい。頑張つてみます。」

……………どっちの提督が不器用なんだろう……………むしろそっちの方が気になる……………。多分

姉はそこまで不器用じゃなさそう……。完璧超人寄りだし……。

でも弟は刺繍とか裁縫とか卒なくこなすし……。どうなのでしょう……。

鳳翔「……女性の方よ。…後ズボンよりもスカートの方がいいわ。」

「……えっ？」

姉が不器用……。？んなアホな……。

鳳翔「……貴女、体型は良いから案外……。いや、何でもないです。今のは忘れてください。…あと、もうひと眠りすればいいのよ」

――

倭side

「……で、なんで俺がこうなる。」

夜雨「……さあ?というより、なんで縛られてるんですか?」

「むしろ俺が聞きたいんだが。」

しかもなんか変なの飲まされたし……。いつもなら一瞬で無力化出来るはずなのに何故か全くできない。

しかもいつもより思考回路が回る。さらに感覚が敏感になり、力が入らないことを考えると飲まされたのはお酒と媚薬……。か。

夜雨「……で、謎に閉じ込められてると。」

「……それはお前もだろ。」

夜雨「そうですね。……ふふ。」

……夜雨の様子がおかしい。なんだ、何をする気だ……。ち、近い……。なんかいい香りもしやがるし……。それは時雨の服か?!

夜雨「……ねえ、倭。」

耳元で囁くな、俺がおかしくなる！あいつの声を聞くだけでなんでこんなに落ち着く……いや、鼓動は早くな……っ……落ち着け俺……アイツは……。

夜雨「……観念してください」

ぐっ……後で覚えてやがっ……っ……／／／／／

夜雨「……たまには甘えてくれたっついていいんですよ？いつも寝れてないらしいですし。」

……っ。なぜそれを知っている……っ……。

夜雨／時雨／鈴奈『……さあ？なんででしょうね？』

す、鈴奈っ?!時雨っ?!な、何故……っ!……夜雨の後に隠れて……いや、湧いて出てきた……っ!?

鈴奈「……私のこと……」

夜雨「私のことが……」

時雨「僕のことを……」

……っ……い、一斉に……耳元で囁くな……っ……／／／

夜雨／時雨／鈴奈『……好きなんでしょ？♡』
違うっ……俺はニンゲンなんか……二……ッ！

時雨「それに……♡」

鈴奈「……♡」

夜雨「……硬いね♡」

……っ……やめ……□……ッ……！

本能的な危機感と男という本能が入り交じる。ヤバい。とりあえず何がやばいかは分からないけどとにかくヤバい。

夜雨「……♡」

鈴奈「……♡」

時雨「♡」

夜雨／時雨／鈴奈『……いただきます♡』

ヤメ……□……ッ……！

――

「っ……………夢……………」

……………なんと言うか、……………夢で良かったのかよくわからん夢だったな……………。
冬なのに不快な汗でぐっしり濡れている。……………後で干さなきゃ……………え？

俺の体が立ち上がろうとした意志に反して布団に逆戻りをした。

夜雨「おはよ。寝っ転がったままあんまり動かないでね。耳かきするから。」

「?!……………お、おう。善処する。」

なるほど、夜雨こいつに引きずり戻され……………夜雨?!……………さっきのは……………同じ香り……………まさか……………俺は……………。

時雨「……………はあ。……………倭のバカ……………。朴念仁。」反対側やつてる

鈴奈「……………zzz」↑足元で寝てる

「……。」

どうしてこうなった……。もしかして……。事後……。いや、俺がそんな……。

『……♪』

「……っ?!」

夜雨「こーら、あんまり動かないでっつて。慣れてないんだから……。ん、しょ……。全然耳掃除してなかったでしょ?結構溜まってるよ。」

時雨「倭にしては珍しいね。これだけ耳垢を貯めっぱなしにしてるのっつて。」

「……最近忙しかったからな。」

夜雨「……すごい寝汗ね。」

時雨「初めの時はもっと酷かったけどね。またあの悪夢でも見たの?」

「……いや、……。違う……。うん、違う……。」

……言えない。夜雨や時雨や鈴奈とアーンなことやコーンな事をした夢だなんて

……

時雨「……僕は別にいいのに……／＼／＼／＼」

夜雨「……／＼／＼／＼」

鈴奈「……zzzzz」

……俺はこの3人を護る運命なのかなあ……

「……(戦闘時) なんかあつたら俺が(護衛的な意味で) 守るからな。」

夜雨／時雨／鈴奈「……(彼氏彼女の的な意味で) 本当に守ってくれる……?」

「……(戦闘的な意味で) 男に二言はない。」

この後、三人から夜襲(ベットイン海戦)や遠征(デート)に連れまわされ、出雲に冷やかされたのは、また別のお話。

交わる世界くエイプリルフル企画（笑）く

————夜雨side————

「……なんで私がこんな事しないといけないんですかね？」

倭「……俺に聞くな。」

左から順番に隼鷹、飛鷹、凧紗、龍奈、夜雨（の後ろに鈴奈）、倭と並んでいる見渡しのいい座席。

いや、ここはどうでもいいですよ。どうでも。

「いや、いくら何でも完全無関係な凧^{凧紗}や鈴^{鈴奈}や龍奈ちゃんまで巻き込むのはどうかと思いますよ……。」

倭「……俺に聞くな。」

「いや……隣に居るから聞いたんですけど……。」

龍奈「なかなか面白いもんが見れるからいいんじゃないですかね？」

隼鷹「巻き込んでしまつてごめんなさい……。」

隼鷹「わりいな〜。」

鈴奈「……………」

相変わらず鈴奈は倭と夜雨の後ろに隠れてガクブル震えてる。前までは倭もダメだったはずなのだが何故か平気になったみたいだ。何故なんだろうか…………？

凧紗「なかなか楽しそうだからいいじゃんいいじゃん。」

「…はあ…どうしてこうなった…………。」

—————

事の発端は昨日の昼過ぎぐらいの事。春風、出雲、飛鷹、隼鷹の4人が何故か地面に某聖剣エクスカリバーのようにつ刺さっていた。

もちろん艤装は全員大破状態。

保護…………という名目の使えるものは問答無用で遠慮なく使…………ゲフンゲフン。成り行きで保護…………というか、一時的にココに在籍することになったわけだが…………

春風「倭の方が媚力高いし良い人です!!」

飛鷹「出雲の方がどう考えても良い人です!!」

隼鷹「そうだそうだ——！呑んべえだしいい奴だぜ!!」

春風「料理も美味しいし家事炊事も完璧。非の打ちどころがない倭に比べるのがおかしいです!!」

隼鷹「それは出雲も同じです!!」

春風「倭は出雲と違って変態じゃないわよ!ドスケベでしょ?」

飛鷹「……今なんて言いました?」ブチッ

隼鷹「……あ?」ブチッ

春風「だから出雲はド変態のドスケベでしょ!」

鷹s「それは倭も同じです!!!」

最初は惚気合戦……というか、お砂糖を敷き詰めたように甘ったるい空間での彼氏(婿? ※倭とは誰も付き合っていない)自慢だったが、なぜか殺伐とした空気に代わり、ついには物の投げあいに。

多分春風が飛鷹隼鷹から溢れるリア充オーラに負けて言っではならない禁断の発言をしてしまったからであろうか……。

それに加えて元々(?)が軍艦だけに多少血の気が盛んだったり、沸点が低かったりする娘もいる。

そして、隼鷹飛鷹春風は晩酌中……つまり、お酒を飲んだ状態なので艦娘のパワーブーストをつけた最大出力で物を投げあい始めてしまった。

枕やクッション、お布団や筆筒、掛け軸や時計が入り乱れる部屋。

ただ、(若干一部の艦娘が夜に暴れまくったり艦装で扉を破壊しても大丈夫なぐらい)

元々かなり頑丈に作られているため壁に穴が開くことも窓ガラスや電球が割ることも床が凹むこともない。

が、私はその状態の部屋に繋がる扉を運悪く開けてしまった……。

扉の前で攻防戦を繰り広げていた飛鷹の「踏み込みの良いクツションスロウ」、春風の「腰の入った枕アッパー」、隼鷹の「重力と体重を使ったお布団ブレード」のフルコンボをもろに食らって吹き飛ばす。

「ちよつと、声が大き過ぎグブフェアツ?!」

空をまう書類の束。ああ……また順番を並び直しさせなきゃ……なんて考えてる場合じゃない。受け身、受け身！

倭「……夜雨、大丈夫か？」

私が吹き飛ばした書類の束をそのまま受け止めてさらに私まで受け止めてくれた。倭らしいと言うか、何時もありがとうございます……。

出雲「で、お前ら何やってんの？ここ、一応俺の部屋だから程々にしろ……つて、俺の話の聞け!!おい、それを投げるな!!」

その後からワーワー言ってるもんだに飛び込んで即ボコられてるのが出雲。なんか見た目真面目なのに中身が結構チャライ……というか、軽い？感じの人。

「ありがとうございます……倭さん。ちよつと止めに入ります……ひやつ?!」

隼鷹「脱げ脱げー！ヒヤツハアアア!!アツ?!」

半裸の隼鷹を背負い投げして立ち上がった私を春風の足払いが襲う。そして案の定転倒。追撃のクツションや枕が飛んでくる。……結局3人のすったもんだに巻き込まれる。というか、この3人私しか狙ってないし、もう既に3人とも上半身半裸状態だしいい!!というか、服敗れちゃうから引つ張らないでえ!!

「ちよ……まつて……きやあああ!!!」

3人がかりでもみくちやにされ、上着1枚を脱がされ、カッターシャツのボタンをプチプチに外され投げ捨てられる。

ああ、私のカッターシャツ高かったのに……そしてTシャツ来ててよかった……つて、それどころじゃない!回避、回避い!

飛鷹のクツションスロウが私が居た位置に突き刺さる。

飛鷹「隼鷹、今!」

げ、コンビネーション?!

隼鷹「ここを全力で叩くの、さ!!!」

私の背面に回った隼鷹のフルスイングのオフトゥンブレードが背中中に刺さる。

「……っ……その威力を、貰いましてよっ!」

……勢いとはいえ春風の腕を掴んで扉付近の出雲さんに背負い投感覚でぶん投げてしまった。ごめんね、出雲さん。

倭「……………」

春風「はあうあ！痛い痛い痛い痛い！！！！」

……倭が右手だけで飛んできた春風を引つ掴んでアイアンクローを決めている。左手だけで書類を落とさず持つてるあたり凄いです。

隼鷹「アンタこの娘のパンツ見ただろー！！！！」

飛鷹「貴方見ましたよねー！！」

出雲「ちよ、あれは偶然だ」

飛鷹隼鷹「問答無用！！！！」

オフトウンブレードとクッションスロウが出雲の顔面にクリーンヒットして出雲がぶっ倒れる。

……今書類吹き飛ばしましたよね……ああ……手間が

姉「なんかものすつごいワードが聞こえましたけど、大丈夫ですか？あ、4人（出雲、隼鷹、飛鷹、春風）とも艤装も艦も大破状態なのであんまり無茶はしないでください

い。で、書類が飛んできたんですけど何があつたんです?」

よ、良かった……提督さんが上手い具合に拾ってくれたようです。

……よくよくこの3人を見てみたんですけど

ボヨン♪

ボヨン♪

ボイン♪

そして下を向いて自分のを見てみる。

スツ……ペターン

つま先が見えている。

……悲しくなってきました……見なけりや良かったです……。

春風「倭! コイツらがウンヌンカンヌン!」

隼鷹飛鷹「出雲ー! コイツがウンジャウンジャー!」

倭、出雲「……」ヤレヤレ

「はあ……というか、私完全に被害者ですよね……これ……提督さん、何とかしてくださいよ……」

脱がされた服のシワを伸ばして着直す。物理的にボタンが弾け飛んだカッターシャ

ツ：高かったのに……トホホ……w

姉：「喧嘩するなら演習で勝負つけてください。今なら申請書から艦載機や砲弾の手配ごと全てこつちでやりますよ。」

「えっ。」

姉提督さんがこんな事を言うのはとても珍し……

出雲「いいねえ。その条件乗った。俺が出る。逃げんなよ春風。勝負だ！」
「えっ。」

素で変な声が出ました。正直そうなるとは思って無かったです。だって、飛鷹隼鷹が出るのかと思ってましたし。

代替ってアリなんですかね……。

飛鷹隼鷹「「えっ」」

春風「望むところですよ!!」

ならば、と春風も親玉をだすべく倭をチラ見するが……

倭「……つまらん。勝手にしろ。……春風、自分で蒔いた種は自分で始末しろと俺は言つたはずだ。……（夜雨の分も含めて）書類届けてくる。」

案の定一蹴された。

ヨレヨレシワシワの情けない格好で書類を持って行くことにならなくて助かった

……というより、そういう気配りが倭は上手なんですね。助かります。

春風「えっ……倭……」

……ああ、こっちの先行きがとても不安だ……。

絶対これフルボッコにされて終わるやつですよ……。

—————

（お、思い出しただけで気が重くなってきた……。）

机に頭を載せてゴロゴロ……としても、変わらないですね、この気の重さは……。

倭「……そんなもんだ。」

さり気なく頭を撫で撫でしないで下さい……嫌じゃないですけど、私は子供じゃないです……。

「鈴ちゃん背中抓らないで……結構痛いから……」

鈴奈「……」

無表情のまま更に力を入れてきたと思ったらハットして手を引つ込めた。鈴ちゃんどうしたんだろう……最近ずっと様子が変ですけど……。

倭と話していると露骨に話題転換なりつついてくるなりしてきますけど……何かあったんでしょうか？

「……そういえば、春風のスペックってどれぐらいなんです？」

倭「……」

無言で分厚い書類の束を手渡してきた。……付箋がついてるところを全部読めつて
 ことですよねこれ……。

全然嬉しくないですよこの量は……。

――

旗風型護衛駆逐艦【春風】

主砲……155mm三連装砲【長砲身型】 4基

対空砲……35mmClws 10基

……四連装40mm機銃 10基

ミサイル……対空ミサイルVLSⅢ 8基

……多目的ミサイルVLSⅢ 8基

魚雷……新型超音速5連装酸素魚雷 4基

速度 65.5kt

防御 対36cm

――

パラパラと書類をめくりながらこんな内容とか燃料がなんだとかエンジン特性がど

うなんだとか色々書いてましたけど、「重量と機関出力が増えたから元々機銃レベルが防げればOKの貧弱だった防御を装甲対36センチ防御仕様まで強化を施した」……つていう記述を見つけてしまった。

確実に……というより、対46cm完全防御のこつちフリゲート艦の駆逐艦クラスよりは確実に薄
い、そして遅い……。

多分前提として『過貫通』を狙うためなんですかね……それにしてもこんな紙装甲でよく倭の世界で立ち回れましたね……。

しかも「殺られる前に殺る」という用の強武装があるという訳でもない。

むしろどうやって生き残ってきたかの方が気になるレベルで不自然なバランスの艦
だった。

私個人の意見ですけど、機銃って使い道あるんですかね……？ 弾幕が貼れない発射
レートですし……。

「……出雲ってどんな船なんです？」

興味本位ぐらいで聞いてみたけど、聞くんじゃなかった……。

飛鷹「主砲が61cmで……ああ、資料見せた方が早いわね。はいこれ」

こつちは薄つぺらな紙を二、三枚束ねたものを投げて渡された。

—————

出雲型双胴強襲航空戦艦 出雲

主砲……61cm75口径三連装砲 6基

副砲……203mm単装AGS 4基

……57mmバルカン砲 8基

対空砲……127mm高角砲 18基

……35mmCIWS 16基

ミサイル……RAM 発射機 12基

……多目的ミサイルVLS III 19基

速度 129・7kt

防御 対61cm防御(ゲーム内では対46cm)

重力防壁 β +電磁防壁 β

搭載機(一部予備機等も含む)

〔ヘリコプター〕

SH-60F オーションホーク 1部隊 10機

SH-60H レスキューホーク 1部隊 10機

SH-60J ジェイホーク 1部隊 10機

【偵察機】

E2-D アドバンスドホークアイ 2部隊 12機

【戦闘機及び攻撃機】

F2-J改（自衛隊仕様） 3部隊 15機

F22（元在日米軍仕様） 6部隊 30機

F35-AX改（艦載型を自衛隊仕様に変更） 6部隊 18機

F/A18-E/F（元在日米軍仕様） 3部隊 15機

FX-2 試製心神 1部隊 3機

※F2-J改は対艦番長モード

※F22は空対艦ミサイルを搭載不可能。

※F35は翼下パイロンに対艦ミサイルをを搭載するためステルス性は犠牲となっている。

※F18は航続距離を犠牲に空対艦ミサイルマシマシモード

※FX-2は新機軸の超音速空対艦ミサイルを4発搭載。ただし無尾翼型の『ストライク心神』ではない。

――

……シンプルかつ単純に出雲を表現すると【戦艦】に【航空基地】を積んだような船としか言えない。

艦載機積載量も正規の大型航空母艦並かそれ以上である。多分部隊を素早く展開するために電磁カタパルトと大型エレベーターは確実についているであろう。

しかし図体はでかい分、被弾面積が広いという欠点があるがそそれを「防壁」で防ぐという耐久型……。

倭といい、出雲といい、露骨に私の長所を潰しに来ましたよねこの人……。

はあ……気が重いです……。

隼鷹「なーんかどつかのお偉いさんがね、絶対数の少ないF35の調達が間に合わなかったけど出雲なら大丈夫っしょ！その代わり心神とかいう日本の試作機を送り付けといたぜ！とか言ってたけど、アノゲテモノ、凄いの？」

……いや、そのために私と風紗が徹夜で色々したんですから……。

あ、風紗寝ちやつてるし……私も寝たいのに……。

龍奈「え、心神?!日本の第五世代多用途戦闘機の試作機をこんな所で出しちゃって大丈夫なんですか！」

とても興味津々で食いついている龍奈。……私を揺すらないでお願いだから……。

姉 t 「大丈夫大丈夫。私と夜雨と凧紗が出向いてちゃんとお偉いさんには許可を取つてるから、ね？」

龍奈 「なら大丈夫ですね。」

……まあそうですねですけど……あー……太陽が眩しい……。

姉 t 「おやすみー……zzzzzz」

弟 t 「……zzzzzz」

寝やがった。提督コイツさん寝やがりましたよ。

うがー。

「……私も寝ていいですかね……ふああ……」

龍隼飛 「ダメです。」

うん、この人達、鬼ですね。

倭 「……寝るなら勝手にしろ。何なら膝枕でもしようか？」

冗談とはいえ倭の膝枕……なんて魅力的な内容。

「是非お願……痛い痛い!!」

鈴奈 「……」

鈴ちゃん、背中つねらないで……結構痛いから……。

やつぱり鈴奈、倭の事が……？いや、そんなことは無いか。ちゃんと真面目にやりな

さいってことですかね……。

龍奈「……ふああ……眠……………」

……あの真面目な龍奈までうつらうつらしている。ウチら壊滅じゃん……。とりあえず倭が膝枕をしてくれると言うからお言葉に甘えて……。倭の膝の上まで頭を持っていく努力も虚しく、机の上につ伏した。

見かねた倭が自分の持つていたなにかを私、凧紗、龍奈に優しくかけてくれた。

……何故か鈴奈にも渡している……。まあいいや……。

「あ……………」のまま寝たいです……………」

倭「……………終わったら起こす。」

……外套……かな？……これ……………とつてもあったかい……………。

心地の良い暖かさと薄らと芝生の香りがする倭の外套。

昼寝するには丁度いいかも……………。

眠りの波にずるずる引き込まれて、遂に全身どっぷり浸かることになってしまった。

倭「……………おやすみ、夜雨」

……耳元で優しく囁かないでください……そんなことされたら……………私……………。

書かれた文章ははここで途切れている▼



夜に降る恋の雨

コラボ編—01—A 【61cmのロマンを語る怪物】

夜雨 said in 第1 / 第2 パラオ鎮守府の棧橋付近

180と190といった所か、私よりも大きい人が立っている。

もちろん弟提督ではない。ましてや一般の人間ですらない。
なぜなら自分の艦から降りてきたからだ。

(敵……ではなさそうですね)

全砲門が最大仰角、主砲は50度程度上に向いている。

主砲サイズは……60cmは確実にある。

でかい。まずこの一言でしか表せられないほどでかい。

無駄にでかいという訳ではなく、必要に応じて大きくなった感じである。

夜雨「すみません、貴方は……」

倭「俺か？ 重装護衛艦 倭だ」

やまと

棧橋を挟んで反対側に停泊している大和型戦艦よりも大きい防空戦艦^私夜雨と同じかそれよりも少し大きい。

装備配置的には改大和型か超大和型だが高角砲が見当たらず、15cmクラスの連装副砲：射角的には両用砲と20cmクラスの三連装副砲が最大仰角で鎮座している。

対艦戦闘特化というわけではなくバランスよく全体が高い水準でまとまったように見受けられる。

要約して言えば【対超兵器用の戦艦】という事だ。

夜雨「何故倭さんはここに来たのですか？」

倭「提督に輸送船団の護衛のついでにドラゴントライアングルの調査をしてこい、と言われて調査中というたた寝してたらここに来た。ちなみに貴女の名前は？」

夜雨「……名乗り忘れてましたね、ごめんなさい。春雨型防空戦艦2番艦 夜雨です」

相手の名前を聞く前にまずは名乗るということを忘れていた。

倭「春雨型の……夜雨、か。で、ここはどこだ？」

姉提督「私が代わりに答えるわね。ここはパラオ、ちなみに私はパラオ第一／第二鎮守府の連合鎮守府にいる2人提督の提督のうちの1人、姉提督よ」

弟提督「んで、もう1人が俺、コイツの弟の提督だ。便宜上弟提督で構わん」
偶然横から歩いてきた二人の提督。

倭「パラオ泊地は深海側の攻撃によつて廃墟と化していると思つていたんだが……違う世界、という訳か」

姉提督「そうね。私たちのところは—パラオ鎮守府—だよ。ちなみに君の名前は？」

倭「俺は、倭。倭型重装護衛艦倭だ。こつちの大和型や夜雨とは何もかも違う化物つてところだな」

弟提督「そうか。にしてもでかいな。主砲60cmクラスの45……いや、60口径の三連装砲か？」

倭「ご名答。61cm60口径三連装だ」

弟提督「ロマン溢れる主砲だな。夜雨も積んだらどうだ？」

唐突に話を振られる。正直な所巨大主砲はあまり好きではない。当たれば強いけど当てるまでが大変なのと、速力と旋回能力が落ちるからだ。それに……

夜雨「多分サイズの厳しいですね。仮に積めたとしても重さで沈んでますよ」

実は姉提督に無茶言われて試しに「46cm45口径三連装砲」つまるところの大和砲を積んでみたら、みるみる沈んで行つた事があるんですよね。ほんと怖かつた……つてことをふたりの内緒にしていたのですが……

姉提督「夜雨ちゃんは大和46cm45口径三連装砲積んだら危うく沈みかけてましたもんね。無茶言っ

ちやだめよ」

思いつきり言われてしまいました……

現状の兵装だと35・6cm75口径連装砲を4基下ろして空いたスペースに46cm45口径三連装砲を2基積むことになる。

計算上だと何とか積める……と、思つてた時期が私にもありました。

実際積んでみるとみるみるうちに沈んで着底してしまつたんです。

春雨ちゃんや瑞鳳ちゃんに笑われたんでした……うう……。

夜雨「えつそれ言つちやダメつて……」

姉提督「ごめんなさいね？ ついうっかり」

首から上がみるみる熱くなり真つ赤になる。

夜雨「ああ……死ぬほど恥ずかしい……／＼／＼／＼」

弟提督「そういえば俺、照れた夜雨ちゃん初めて見た気がする。案外可愛いんだな」
弟提督にからかわれる。というか、何かあれば便乗していじつてくる。男の人つてこ
ういう方が多いのでしょうか。

夜雨「からかわないでくださいよー！ もー……死ぬほど恥ずかしいんですから／＼

必死の抵抗を試みる私。そんな私に救いの横槍を入れてくれたのは倭だった。

倭「三人で取り込んどるところ悪いんだが、とりあえず帰れるまで俺はここで世話に

なる感じだが、それでいいんだな？」

姉提督「そうなるわね。ようこそ！と、言えるほどのものは無いけど、歓迎するわ」
倭「そうか、世話になる」

しかしここで問題がひとつ発生する。そう、部屋の問題だ。倭は巫女ではなく艦息。つまり、鎮守府の規則に則り艦娘用の部屋が割り当てられることになる。

姉提督「とりあえずうちには男用の部屋は無いから……夜雨ちゃんの部屋……も考えたんだけど、ひとり部屋の方がいいかな？」

弟提督「男だしどう考えても一人部屋の方がいいんじゃない？どうなんだ倭」

しかし、提案は意外なものだった。

倭「ふたり部屋が空いてるならそこを頼む」

姉提督「空いてるわよ。でも何故？」

倭「いや、実は……ちよつと来てくれ」

倭が後ろを向いて手招きをする

時雨「呼んだ？」

出てきたのは倭さんのところの時雨改二……？だった。

背中の艤装や腰の主砲がコンパクトにまとまっているが、脚の魚雷発射管が大型化し

ている。

普通の時雨ではないようだ。

時雨「あ、き、来ちゃった☆」

姉提督「あら、時雨ちゃんじゃない。そういえば今遠征中じゃなかったっけ？」
確かにパラオ鎮守府の時雨は遠征に出ている。

倭「いや、俺の世界の時雨です。装備見せれば一瞬でわかるぞ」

時雨が艦を展開する。

夜雨「わーお。まさかこの新型超音速酸素魚雷4連装に
57mm六砲身砲塔型バルカン砲に特殊弾頭4連装誘導魚雷…」

姉提督「……聞いたことない装備があるんだけど」

ちなみに、酸素魚雷とは大日本帝国最強の切り札である。

当時の魚雷は良くても射程が10km程度。

酸素魚雷はそれよりも遥かに射程が長い。

燃料の酸化剤として空気の代わりに空気中濃度以上の酸素混合気体もしくは純酸素を用いた魚雷である。

ちなみに単純に「酸素魚雷」と言うと、大井や北上がセリフで出る「九三式魚雷」か潜水艦用の「九五式魚雷」を指すことが多い。

性能面的には当時の魚雷と比べて長射程、無航跡、高速かつ大量の炸薬量を搭載できるが、爆発事故のリスクも大きかった。

新型超音速酸素魚雷はこの酸素魚雷の派生系で「スーパーキャビテーション」という物理法則を使い、水の抵抗を減らして酸素魚雷の長所を伸ばした魚雷である。

特殊弾頭魚雷は通常／酸素魚雷の別の意味での最終形態。

射程もそこそこあり誘導機能が付いているため、使いやすいが、広域の「範囲攻撃」なので味方を巻き込まないように注意が必要である。

姉提督「完全にこっちの世界の魚雷とは別物ですね。ちなみに夜雨ちゃん、これって強いのか？」

夜雨「魚雷は驚異的ね。ただ57^デm^スm^ア砲塔型バルカン砲^{ベン}の射程が心もとないと思う。ただ、深海棲艦相手ならオーバースペースク気味ね」

弟提督「なるほど。重雷装巡洋艦と似たようなもんか？」

龍奈「いや、それはちよつと違うと思う。イメージとしてはゲイボの方が甲標的、デスランの方が榴弾魚雷がいいかな」

後ろから龍奈が唐突に声をかけてくる。

夜雨「あれ、龍奈じゃん。どしたんさ」

龍奈「副長が酒飲みたいからって半舷上陸させてもいいか聞いてこいってよ」

夜雨「了解、許可するわ」

龍奈「了解、ちゃんと伝えるね。提督さん、ご飯の時にアレ頼むわね」

アレとは、開発／実装した方がいいと思われる装備や施設の検討大会の事である。

姉提督「了解、お願いします」

弟提督「うい。るなちに負けないように考えておくよ。とりあえず倭と時雨のために部屋案内してくるわ」

龍奈「るなちって呼ばないでくださいよ？怒りますよ？」

問答無用で懷に飛び込みアツパーカットを寸止めで繰り出している。

弟提督「わーったわーった」

龍奈「わかつてないでしょ！」

姉提督「あーい。とりあえずいつてらー」

弟提督「んじゃ倭、付いてきて」

倭「了解。時雨、行くぞ」

時雨「わかった」

逃げるように弟提督が歩いていった。

姉提督「そういえば龍奈ちゃんが開発したこと無かったよね？夜雨ちゃんもついでに

一緒に付いてきて」

夜雨「了解」

龍奈「はい」

……ついでですか。私は。

久しぶりの工廠。相変わらず無駄に大きい。

装備する偽装に見合わないほど装置がデカイ。

艦装サイズならちようどいい大きさなのだが……

姉提督「んで、妖精さんがここに資材をぶち込んでくれるからボタンを押せばできる
」⁹

龍奈「成程。すごい妖精さんの機械という訳ですね。了解、やってみます」

姉提督「資材量はとりあえず燃料10／弾薬251／鋼材250／ボーキ10で」

これは「主砲、砲弾全般レシピ」と呼ばれるもので主砲または砲弾を効率よく生成できるレシピである。

ヘルメットをかぶった妖精さんがせつせと資材を機械の中に運び込む。

工廠妖精「だいじょーぶですよ！」

龍奈「ありがと。ポチツと！」

機械が轟音を吐き出し動き始める。

姉提督「まーたぶつ壊れ性能なのが出たら笑うしかないわね」

夜雨「ほんとそれですよ」

龍奈「あ、出来たみたいですよ」

轟音が収まり機械の取り出しおランプが点灯する。

夜雨「んじや早速開けてみますか」

無駄に重いシャッターを3人がかりで上にずらし、中からモノを乗せた台を引っ張り出す。

姉提督「……何ですか、これ。機雷のようなものだけど」

台の上には80cmぐらいの金属球体のような物が並べられたモノが鎮座していた。

夜雨「囷投射装置ですね。まあ、誘導兵器類が飛んでこないこの世界では無用の代物です。次行きましょう」

次に台の上に乗って出てきたモノはどう見ても日清戦争以前に使われていた見た目の怪しい砲だった。

姉提督「……解？体不可避ですよね。これ」

夜雨「……解体不可避ですね」

龍奈「……なんかごめんなさい」

姉提督「気を取り直して次行ってみましょう」

その次に出てきたのは大きな四角い箱の様な外見のモノだった。

夜雨「あ、これ私が発電用に積んでいる発電機と同じモノです！」

龍奈「ホントだ！出力はこっちの方が低いですけど燃費はこっちの方が少しいみたいですね」

姉提督「これは非常に心強い装備ですね。鎮守府の非常用発電機として使わせてもら
うわ。次」

最終的に出来上がったのは上記のモノに加え

【発電用ガスタービンエンジン】×2

【発電用ディーゼルエンジン】×3

【57mm地对空砲】×1

【20mm地对空6砲身機関砲】×2

でした。

つまり、艦娘が有効に使える装備は何一つとして出来なかったので龍奈は若干凹み気味。

夜雨「どんまい。そんな時もあるよ」

龍奈「だつてえ……」

姉提督「夜雨ちゃんも一回やってみたら？」

夜雨「んじややってみますね。えーつと燃料10／弾薬251／鋼材250／ボーキ

10ですよね、つと……えいつ」

機械が爆音を立てて再び動き始める。

しかし今回は様子がおかしい。

姉提督「あれ、こんなに長いのは初めて……」

工廠妖精が機会の隙間から1人走り出てくる

夜雨「え？なんか変なもの入れなかつたかつて？普通にそこにおいてあ……」

置いてあつた資源の山の中に周り比べて一つ小さい山があつた。

夜雨「姉提督さん。あの水槽と油槽の中の山は……？」

姉提督「何でしょう。私にもわからないのですよね」

龍奈「多分レアメタル類ですね」

姉提督「れあめたる？なんですかその金属」

龍奈「希少価値の高い金属で、廃棄処分されてるのが勿体無いから集めておいたんですよ。自然発火性や反応性が高いので水中または油中に入れて暗冷所保管が基本ですからちようど良かったのでここに」

工廠妖精「それをボーキと間違えて入れたらこうなりました」(テヘペロ

夜雨「……とりあえず動きが止まつたら出してみますか」

姉提督「何が出来るか逆に楽しみですね」

龍奈「早く終わるように私も手伝ってきますね」

夜雨&姉提督「ちよ、待っ……行っちゃった」

姉提督と私が声をかけるよりも先に機械の中に体を滑り込ませて行つた。

しばらくして龍奈が油まみれになって戻ってきた。

龍奈「出来たから開けていいよ」

夜雨「3、2、1で開けます。せーの！」

姉提督&夜雨&龍奈「3！ 2！ 1！ そーれ！」

中から出てきたのはなんとあの夜雨が積んでいる【αレーザーⅢ】だった。

夜雨「うっわ。私のアレですね」

姉提督「……」ポカーン

龍奈「わーお」

姉提督「あと20回ぐらいやってみます……？興味本位ですけど」

夜雨「やるしかないですね」

龍奈「不可避ですね」

姉提督「ですよねー。んじや、私も手伝います」

腕まくりをして姉提督も機械の裏側に入ってしまった。

この後出てきたのは

【αレーザーⅢ】×1

【51cm75口径三連装砲】×2

【57mm速射砲】×2

【43.2cm75口径電磁火薬誘導三連装砲】×2

V.T.信管付き対空弾
【近接炸薬弾】×1

【祝砲】×1

【三式弾】×1

【にゃんこビーム】×2

【零式斬空弾】×1

【連装電磁侵食弾頭（潜水）魚雷】×1

【5連装音響誘導魚雷】×2

【電磁侵食弾頭】×1

【超長射程巡航ミサイル】×2

だった。

姉提督「大口徑砲：VT信管……まだこの辺はわかるわ。下の兵装sの説明して欲しいかな」

龍奈「えつと【にゃんこビーム】は猫の見た目をした強力な面制圧攻撃のできる生態応用光学兵器です。

【斬空弾】は重力防御システムを臨界飽和崩壊、無力化させるために開発された通常の砲弾よりもかなり重たい砲弾です。

【連装電磁侵食弾頭（潜水）魚雷】は電磁防御壁を飽和崩壊させ無力化させる可能性があ

る魚雷です。

【電磁侵食弾頭】はそれの砲弾版ですね。

【5連装音響誘導魚雷】は音響追尾式魚雷で高い命中精度を誇ります。

【長超射程巡航ミサイル】は超長距離を飛翔し敵を攻撃することが出来る艦対艦長距離誘導噴進弾です。

これで大丈夫ですか？」

姉提督「ありがとう、なんとなくわかったわ」

工廠妖精「疲れた……」

夜雨「妖精さんお疲れ様。そして、ありがとうね」

工廠妖精「いえいえ。私たちの仕事ですから」

夜雨副長妖精 side

副長妖精「あー、久しぶりに艦長が半舷上陸許可してくれたいし酒保でも行くか。久しぶりに酒飲むかあ…」

パラオの酒保といえは【翔鳳】一択、と呼ばれるほどの美味しい物が食べられる場所である、と艦長が言っただけ。

とりあえずそこに行くことにした。

暖簾をくぐる。

副長妖精「どうもです」

鳳翔「あら、いらっしやい。えーつと、夜雨の副長さんかしら」

出迎えてくれた女将さんこと鳳翔さんは軽空母艦娘とここの女将さんの兼業をしている。

もともと小柄で搭載機数は少ないが、世界初の最初から空母として建造された艦である。

副長妖精「そうですよ。女将さん、焼酎の氷水割りと焼き鳥セットと白ご飯をお願いします」

そう言っただけカウンター席の一番壁際の席によじ登り、椅子の上に座る。

鳳翔搭載機【零戦21型】妖精「こちら、突き出しのオヒタシになります」

突き出しとは、”お通し”とも言うが関東か関西かで名前が変わるテーブルチャージ代わりの料理である。また、”注文を承りました”という意味もあるらしい。

鳳翔「あ、忘れてた。夜雨副長さんにこれを」

鳳翔さんの妖精さんに注文した物と妖精用の椅子を出してもらった。これで一応カウンター席に座れた形になる。

副長妖精「すいません、ありがとうございます」

鳳翔「こちらこそすいません、すっかり忘れてました」

そう言つてコンロに火をともし、串を焼き始めた

副長妖精「いえ、大丈夫です。頂きます」

最初はチミチミ飲むつもりだったが、料理とお酒が美味しすぎてつい…

鳳翔「あのー……副長さん、いくらなんでも飲みすぎでは？」

鳳翔搭載機【零戦21型】妖精「もう一升瓶1本は軽く飲んでますよ。そろそろ止めときましようね」

副長妖精「もつとのみゅー…もつとのみゅんーだー!」

鳳翔「ダメです。ほら、水飲んで少し酔いを醒ましてください」

副長妖精「ちえー……」

頭痛てえ……目の前ぐるぐる……あー……水が旨い……ふう、少しすつきりした。

これは……不味い、まっすぐ歩けない。

艦まで帰れるかな……。

「とりあえず……おてあらい……いてきまふ」

とりあえず店の奥のトイレに行つて勘定してから帰ろう、

そう思つて立ち上がりふらふらした足取りでトイレに向かう。

しかし……

鳳翔「副長さん、本当に大丈夫ですか?」

副長妖精「たぶんー、あえっ……」

柱がスローモーションで近づいてくる。否、私が倒れているのか。

……顔面直撃コース。

回避せねば。

しかし無情にも体が言うことを聞かない。

衝撃が頭を揺らす。

そしてそのまま地に伏してしまった。

コラボ編—02—A 【Code Name】

???
side 洋上「……艦即……に撤退！1隻で……多く!!1……りで……遠……逃げ……!!」
壊れた無線機からノイズ混じりに聞こえる司令官の声。…私の艦隊は今、全速力で、奴ら、から逃げている。
急に艦隊後方に現れた奴…。

艦首に二つの回転する物体が艦首にあり、超巨大な連装砲を載せたかなり細長い船が1隻。

艦尾に巨大な飛行甲板を背負い、巨大な砲とロケット砲を撃ってくる船が2隻。
艦の大きさは全て大和型よりもはるかに大きい。そんな物体が私の約3倍速で動き回っている。見たことも聞いたことも無い。勿論、
対処の仕方も知らない。

また1隻、また1隻。

追いつかれては削られ、主砲や多砲身回転式砲で撃ち抜かれ、爆散する。

備え付けの連装砲で応射するも速力に圧倒されて見当違いの所に水柱が上がる。

《あーあ……。聞こえ……。な？チ……。なゴミムシ共……。はモール……。号がお……。いかな
 W W W アハハ……。ハ W W W 》

両舷1杯の長期間連続運転で主機が悲鳴を上げている。

《……レ？ W W W ……ないみたい……。ね W W W ギヤハハ……。ハ W W W 》

突然3隻の姿が本来対水上用では無いが13号対空電探改のスコープから消える。

妖精さん達に目視で見てもらうが「何も無い」としか帰ってこない。

甲板に降りて周りを見渡すと味方だった艦の破片や油が浮いている。

私以外に艦の外見を保ったまま浮いている艦は無かった。

だって対艦火力、対地火力、防御力、速力、耐久力は確実に上、対空火力は効率論だけなら私の方が上ですが、実質火力は倭さんの方が上ですし。

唯一私が倭さんと張り合えるのはジェット艦載機の運用能力と対潜火力だけという状況なのは否定できません。

———その原…

開発コンセプトの差と制作世界の技術力の差ですね。これだけはなんともならないです。

……それでも私は鋼鉄の艦だから。

自分のやることをキッチリとやり通して、そして必ず帰ってきます。

それが私の……

(→週刊壁新聞「ワレアオバ」夜雨へのインタビュ―他の記事)

……こっちの青葉にも失望したよ。まさかこんな記事をかくなんて、ね。
後でぶん殴っておこうかな。

この欄の下に倭×夜雨の漫画を書いたオータムーン……秋雲、かな？
も一緒に。

……そういえば提督室に來いって言われてたよね。

秋雲と青葉をぶん殴ってからでも大丈夫だよね？（暗黒微笑）

秋雲&青葉（ひいひいひいひい……）

※この後、この2人は気絶した状態で発見されました。

—————倭side in 提督室 —————

「えっ?!」

「男?!」

「男の人っばい!」

「まあ、たくましいわね♡」

「アイエエエ！wwwwナンデwwwwオトコナンデwwww」

「ひえええええつつwwww」

「これは……どういふ事なのデース」

……五月蠅い。とにかく五月蠅い。

少なくとも俺の周りに50人以上の艦娘が取り囲んでいる。

……ひっそりと自分の艦で時雨と食事をしてきて正解だったな。食堂で食べてたら完全に飯どころじゃなかった。

「へえ……意外と瑞雲な顔をしてるな」

「凜としてるけど優しそう、です。はい」

「……意外とむつつり……してそう」

「イケメンさんかも、です」

……とりあえず耳元でワーキヤー言うのだけはやめてくれ。瑞雲……？晴嵐改の方が性能良くないか？むつつりってなんだよ……。陸奥釣り？か？もうわけわからねえ……。

姉提督「なんと言うか……やっぱり？」

弟提督「予想はしてた。仕方ない」

——はあ…。誰か助けてくれ…。俺の上に6人乗るなし…。

時雨「……そろそろ僕のやまと……じゃなかった。会議の邪魔になるから解散してもらってもいいかな？（ニコオ）」

絶対零度に空気が凍る。提督室の出入口付近に居る時雨の笑いには慈悲という言葉が全く見当たらない。と、皆が言ってた。

俺はそうは思わんけどな。

「な、なんか普段の時雨とは全く雰囲気が違うっぽい！怖いっぽい！」

「ひえええええ!!」

「妙高姉さんよりも怖い……」

「チツ…なんて指揮……」

「これだから駆逐艦はウザイ……w」

「まあまあ、そんな事言わなくてもいいクマー」

「そんな事より夜戦しよ！」

「5500t軽巡一隻うるさい！」

「あたし的にはオーケーです！」

「…ひきこもる」

「……なんていうか。最後の方あんまり関係なくないか？なんでみんなそんなに怖がるんだ？そして、なんていうか、こう、うん。」

倭「時雨、ありがとう」

時雨「これでいいん、だよな？」

倭「十分だ」

時雨「えへへ♡」オメメハート&スリスリ

姉提督「うわー…時雨がこんなに独占欲ぶちまけるのは初めて見たわ…」

弟提督「俺もだ……」

夜雨「同感だけど、ちよつとやりすぎかな？」

凧紗「確かに怖いけど、恋敵にしなければ大丈夫なタイプね」

龍奈「意外な一面があるんですね。私はそこまで怖いとは思いませんでしたけど」

鈴奈「……凄い……これが……愛の力……」

倭「……え？」

……全くもって訳分からん。女ってというのは。

で、どうして時雨は俺の膝の上に乗るんだ？

嫌じゃないけど、周りの視線が痛いから出来れば隣に座ってくれ。な？

…最悪同じ椅子でも構わんど。

—————

夜雨side in提督室

提督室で行われていた会議。

必要な情報交換、装備、運用の考案等、順調に進んでいたのだが……

姉提督「えーつと、倭の特徴は

・原子力で航行する

・射程100km程度の長砲身61cm砲

・小型軽巡洋艦並の旋回性能と100knott以上の快速

・夜雨と同等の連射力

・航続距離は理論上無限

・対空火力は夜雨以上。ただし、効率は夜雨の方が上

・特殊砲弾あり

- ・ 既存艦艇の砲では貫けない装甲
- ・ 弾薬庫はない

- ・ 艦載機は何故かレシプロ水上機

- ・ 耐久性能は不明

- ・ 時雨love

……既存の『戦艦』という枠を遥かに凌駕してるわ。これに関してですが、新たな枠を作ろうと思うの」

姉提督の唐突の発想で、話の方向性が唐突に変わる。

書類の取り扱い上、そういう略称がないと手がしんどくなるらしい。変なところでもんどくさがりな性格があるようだ。

ちなみに私は『防戦』らしい。……海防戦艦かな。いや、防空戦艦だけ。

倭「……ちよつと待て。最後のおかしい。俺専用の枠に関しては悪くはないが最後のはおかしい」

夜雨「えーつと……最後のは置いといて、私みたいに既存枠じゃない枠を作るってことですよね？」

姉提督「ええ、そうなるわ。というか、最後のが一番重要よ」

絶対に重要じゃないでしょ。それ。

…いや、待てよ？私に結婚指輪を二つほど铸造しろって事ですかね。

龍奈（金属アレルギーとかがあった場合は厄介なのでチタン製が一番無難かな…）

弟提督「既存組のどれにも分類できないのは厄介だな」

倭「…厄介って言うな。コッチの世界では俺が普通なんだよ」

弟提督「えっマジ？」

時雨「記録を見る限りではマジだよ」

弟提督「おっふ。サーセン」

……倭クラスが普通って流石にそれは言い過ぎでは無いんですかね。

姉提督「夜雨ちゃんみたいに防空戦艦的な名前を考えられるか、重武装装甲護衛艦と名

乗ってるからそれを採用するか。ですね」

龍奈「とりあえずはその二択ですね」

鈴奈「…他に……ない……」

姉提督「とりあえず案を出してって頂戴」

夜雨「では早速。大井、北上の重雷装艦的な感じで重砲装艦とかどうです？」

姉提督「重砲装艦ねえ……なんかぱっとイメージが出ないわね」

弟提督「重雷装艦のイメージのせいで、砲だけクソでかい紙装甲艦になってるんだが」

ジユウライソウカン……重雷装艦……雷撃特化の艦……球磨型軽巡洋艦の大井、北上、

木曾の改以上（木曾のみ改二限定）のことを指すらしい。

敵に対して飽和雷撃を加えて艦隊決戦前に相手を減らすという考えの元、生み出されたいらしい。

龍奈「んー、なら、駆逐戦車的な感じで『駆逐戦艦』とかはどうです？」

凧紗&夜雨&姉提督「駆逐艦いるから紛らわしいんじゃない……」

龍奈「ですよねー……」

鈴奈「……超戦艦？」

夜雨「それは……アレだね。超兵器になっちゃう」

鈴奈「……うう……やっぱり……」

姉提督「えーっと、その【超兵器】って何です？」

倭「その称号を持つ軍艦1隻で4艦隊もしくはそれ以上が軽く瞬殺できるレベルの兵器……といえはわかるだろう」

姉提督「……え？」

夜雨「……倭さんって意外と説明するのは苦手なんですネ。それぐらい強いってこと

ですよ」

姉提督「……とりあえずそういう時にしておきますね」

弟提督「んー。ならば、巡航戦車的な感じで【巡航戦艦】！これならどうだ」

姉提督「巡航戦車って確か高速だけど重雷装艦同様に紙装甲なイメージが……」

弟提督「いつも否定ばかりするけど、たまには意見を出したらどうだ？」

……確かに結構批判体質ある気がする。

姉提督「……今の所の私の案は機動戦艦なのですが……ちよつと色々アレなんです」

弟提督「おいちよつと待て。それ俺が過去に読んでた小説にあつたやつだよな。他作者様のパクリは良くないぞ」

……メタ発言自重しない方向ですか。

二次創作という意味ではこの小説もかなりアウトな気が……。

姉提督「あつ、残念。花の名前の方も、入ってます」

……まさかのパクリスペクトですか。はあ……そのうち改大和型とかミサイル論者戦艦とか航空機動戦艦とか出て来そうなんです、そのへんどうなんです？あ、なんか案あります？ 中の人さん。

《あ、端末の中に無理矢理システムを滑り込ませたのバレちつた？えーつとそれに関し

ては大丈夫よ。こつちである程度制限をかけて出さないようにしておくから。案は【快速重装護衛戦艦】でよろしく〜》

私のサブ端末の画面に映し出される立方体の様な物。

立方体なんだけど、平面の六角形の方が近いかもしれない。

そこから私と同じような髪の毛が生えている。

……なんというかもものすごくシユールである。

(いや、そこから出てくるのかよ……。というか、私の回想シーンを返して……)

夜雨「……えーっと、快速重装護衛戦艦とか……どうです?」

凧紗「いいね、それ」

龍奈「それにしましょう」

鈴奈「……異議……無し……」

弟提督「んじゃそれで」

姉提督「それにしますか。略称は快戦で大じようb……」

姉提督の視線の先。

倭と時雨の姿がある。

肩を寄せ合いもたれかかりながらゆっくりと息をしている。

ここでふと気がつく。途中から二人の威圧が消えていたことに。

夜雨「……なんというか、うん。カップルですよねこの2人」

風紗「カップルというよりも夫婦の方が近い気が」

龍奈「しー。そつとここから離れた方が良さそうよ」

鈴奈「……倭さん……寝顔……可愛い……／＼／＼」ニヘラツ

龍奈「……あの人見知りの鈴奈がデレた、だど……」

姉提督「なんか悔しい……」

夜雨「こんな日がずっと続けばいいのにな……」（見事なフラグ建築）

ー
ー

コラボ編—03—A 【Concept】

夜雨 *side in* 自室 *with* 熟練見張り妖精&鈴奈&龍奈&凧紗

夜雨「どうしてこうなった……」

私含めて5人で円の形に座っている。(そもそも妖精つて1人2人と数えるかどうかすら怪しいが)

いや、わかってはいたんですよ。倭と演習するのは。

ただ、運用コンセプト的にアウトレンジ砲撃で数を減らして1対多のソロ凸無双を想定している倭に多対多の分割分担艦隊戦前提の私がどうやってまともにやりあえるのかっていう話ですよ。

そもそも私アタッカー向けじゃないですし。

スペック表ではほぼ全ての能力で私より格上扱いだし……。

はあ……。

…
 熟練見張り妖精《一体どうしろっていうんでしょね…しかも艤装じゃなくて艦つて…》

夜雨「気が重いです…」

熟見妖《うーん…徹底したアウトレンジで航空戦と昼戦を耐えきって夜戦で一氣に懐に潜り込んで叩く以外選択肢が無いかと…》

凧紗「となると、航空攻撃で主砲の機能を半減させればいいってことね」

龍奈「…いや、そんな短絡的にいかない方がいいでしょう。相手は百戦錬磨の猛者ですし、強力な対空砲弾でも積んでると見て間違いなさそうね。それもあつと驚くようなコンセプトのヤツを」

鈴奈「…それに…電子機器に…若干の不具合が出る…電波が…倭からでてる…」

夜雨「ECM?」

鈴奈「…違う…ECCMじゃ…中和は無理…」

熟見妖《いーしー……なんですかそれ?》

龍奈「Electron^電ic Counter^対 Measure^手ment^段とって、レ

ダーや誘導装置の妨害をする装置です。ECCMはそれに対抗する装置のことですよ」

熟見妖「なるほど。ありがとうございます」

鈴奈「……通信機器のエラー……増えた……？」

夜雨「だいぶ出てますね。電波妨害でもかけてるのでしょうか？」

龍奈「まあ、検討がつく範囲ならへんちくりんな装置かエンジンでも積んでるんです

かね」

夜雨「あまり人のこと言えませんけどね……」

エネルギーリソースがその辺にある（海）水という摩訶不思議な主機核融合炉を積ん

でいる夜雨の方が原子炉を積んでる倭よりへんちくりんなエンジンや装置を積んでい

るとも言える。

風紗「今回は16対16の艦隊決戦なのでメンツも決めないとね」

夜雨「そこは決まってるみたいですよ。えーつと、とりあえず読み上げますね。

・16対16

・倭、夜雨は第一艦隊旗艦

・時雨改二剛、春雨剛は第二艦隊旗艦

- ・ 相対距離200kmから開始

- ・ 艦隊行動を前提とする

- ・ 潜水艦と基地航空隊は安全のための哨戒部隊なので誤射しないように。

なお、基地航空隊は双発プロペラ機、F-15、F-35、F-2J、F-4Jのみで編成する。

該当機と管制との交信を傍受しても構わない。

該当機は可変周波信号をほぼ常時発信するので判別はできる。

- ・ 勝利条件は一定時間経過時の「艦喪失量、損害率」及び「艦隊行動の質」で判断する。スタンドプレーで全艦撃沈判定を出してもそれはその個艦の勝利であり艦隊の勝利ではない。

演習の課題は「艦隊」における「連携の質の強化」及び「役割分担」であり、必然的に重点は「艦隊行動の質」となる。

- ・ 使用可能な砲弾は演習用通常弾、演習用徹甲弾、演習用対空砲弾のみとする。特殊砲弾は演習用に改造されたものを審査員（提督）に見せ、許可を得たもののみ可とする。

基準は

損傷を与えないものであること

弾頭がペイントであること

安全であること

と、する。

・装備は旗艦の判断で載せ変えても構わない。

編成

第一艦隊

旗艦

夜雨

高速戦艦

榛名改二

高速正規空母

蒼龍改二

高速軽空母

瑞鳳改

航空巡洋艦

熊野改

重巡洋艦

羽黒改二

第二艦隊

旗艦

春雨改剛

雷巡

阿武隈改二

対空駆逐

吹雪改二

軽巡

由良改

軽巡 夕張改

駆逐 皐月改二

らしいです。

装備はある程度自由らしいのでそこで有利になるように組みたいですね。とりあえず空母は偵察機と高性能艦戦をガン積みしてもらいましょう。着弾観測は……まあ、なんとか無理やり統合処理すれば良いですね」

龍奈「……倭の兵装の推定値ですが、主砲射程は約80〜120km、副砲で30km前後、対空ミサイルは私達と同じのを積んでいるのであれば約200km以上、機銃類は10km弱でしょう。多分このような「要塞戦艦」に近づくだけでも相当な困難になるかと。」

夜雨「つまりざっと50〜100kmまではデスゾーンってわけですね。距離100km、砲弾速度を340m/s、完全な等速直線運動と仮定して砲弾到達までの時間は約5分。倍の速度の680m/sなら約2分30秒、3倍の1020m/sなら約1分つてところかな。1分先のことを精密に予想するのは困難だからかろうじて回避はできると思うけど……不安ですね」

風紗「……真面目に対艦用10t徹甲爆弾どころかスツピンでも無理な気がしてき

た。どうしよう」

龍奈「システムを飽和させるほどの物体を投射するにしてもどれぐらいの攻撃をせいで仕掛けるぐらいしか私にも思いつかないわ。どれぐらいの量を投げればいいのかは検討がついてないけど……」

夜雨「AGSのもう一つのモード超遠距離攻撃を試してみるしかないですね。とりあえず上部構造物を破壊してからじゃないと迂闊に近づくだけで木っ端微塵になりそうですし……」

龍奈「使ったことがないのでシステムエラーを吐きそうですけど、そこはなんとかしてみせるとして、問題はロケット砲弾がどこまで正確に飛ぶかですよ。工廠の妖精さんはどちらかと言えば職人というよりも芸術家みたいに気まぐれですし」

熟見妖「《現品と分解可能な現品と図面があるならかなりの精度まで出来るとか噂で聞いたことはありますけど……》」

夜雨「AGS……というより、速射砲はこつちの世界にもあるらしいからそれで代用するとして、問題は集積回路IC系が作れるか、ですわね」

龍奈「見た感じですけど、IC設備どころかマトモな設備は無さそうです」

鈴奈「……だめじゃん……」

龍奈「そこで、艦の妖精の一部を工廠に派遣して手伝わせてもいいならそれも解決できます」

風紗「その手があったか！」

夜雨「お、採用。後で意見具申してきますね。お昼ご飯の時間も終わったので演習のメンバーが来ると思うから、そろそろ甲板に行きましようか」

—————

in 食堂 with 倭 時雨、加賀、長門他数名

倭「……なあ、時雨。何故俺が艦隊を組まなきゃいけないんだ？そして標的にしかならない空母まで含むってどうすればいいんだ」

弟提督に案内後手渡された紙を1通り見終わったけど内容はかなり理不尽な物だった。

特に超兵器と呼ばれる単艦で戦況をひっくり返し、殲滅できる程度の艦と単艦で戦うことを目的とした艦にとつて艦隊行動は無縁にも等しい。

そして、航空母艦は基本的に艦載機を蹴落とせば何も出来ない艦種であり、特に時代遅れのレシプロ機しかない低速空母（※倭基準だとジェット機とマトモな対艦用装備と

60 knot 以上は必須) は御荷物以外、何者でもない。

加賀「……空母を馬鹿にしたような発言が聞こえたのですが、それは気のせいかしら？」

ほとんど無表情でクールな加賀が珍しく顔をひきつらせて詰め寄る。

倭「事実を言ったままで。航空母艦は艦載機を全滅させてしまえば低速で動く標的に変わる。俺から見ればレシプロ機は囮程度……いや、ミサイルの標的でしか無いし、46cm砲弾の直撃にすら数発耐えれない空母に期待なんてしないよ」

(※鋼鉄勢が異常なだけで倭の考え方も艦娘sの考え方も正しいです。価値観の違いです。お許しください)

長門「…で、そのみさいる？とやらはどんなもんなんだ？」

倭「音速よりも速い自立式誘導機能を持った長射程の噴進弾と言えばわかるな？」

長門「ほう。伊勢が持ってたロサ弾の誘導機能付き版と言ったところか」

倭「あながち間違いでは無い」

加賀「……無視しないで頂戴」

掌を机に叩きつける。

彼女にしては珍しく怒った…というより、火山が噴火したと表現した方が良さだろ
う。

食堂に居た一同が倭と加賀の方に視線を向ける。

加賀「……発言を取り下げ謝罪を要求します。それとも言葉すら理解出来ないのですか？」

彼女が拳を握り振り上げる前にすつと時雨が割って入る。

時雨「まあまあ、もめないですよ。とりあえず倭、その紙をちよつと借りるね？えつと、

・ 16対16

・ 倭、夜雨は第一艦隊旗艦

・ 時雨改二剛、春雨剛は第二艦隊旗艦

・ 相対距離200kmから開始

・ 艦隊行動を前提とする

・ 潜水艦と基地航空隊は安全のための哨戒部隊なので誤射しないように。

なお、基地航空隊は双発プロペラ機、F-15、F-35、F-2J、F-4Jのみで編成する。

該当機と管制との交信を傍受しても構わない。

該当機は可変周波信号をほぼ常時発信するので判別はできる。

・勝利条件は一定時間経過時の【艦喪失量、損害率】及び【艦隊行動の質】で判断する。スタンドプレーで全艦撃沈判定を出してもそれはその個艦の勝利であり艦隊の勝利ではない。

演習の課題は【艦隊】における【連携の質の強化】及び【役割分担】であり、必然的に重点は【艦隊行動の質】となる。

・使用可能な砲弾は演習用通常弾、演習用徹甲弾、演習用対空砲弾のみとする。特殊砲弾は演習用に改造されたものを審査員（提督）に見せ、許可を得たもののみ可とする。

基準は

・ 損傷を与えないものであること

・ 弾頭がペイントであること

・ 安全であること

と、する。

・ 装備は旗艦の判断で載せ変えても構わない。

編成

第一艦隊

旗艦

倭改

高速戦艦	霧島改二
高速正規空母	瑞鶴改二
高速軽空母	千歳航改二
航空巡洋艦	利根改二
重巡洋艦	摩耶改二
第二艦隊	
旗艦	時雨改二剛
雷巡	木曾改二
対空駆逐	初月改
軽巡	五十鈴改二
軽巡	川内改二
駆逐	夕立改二

……うわあ、何となく予想はできたよ。加賀さんは、大好きな、瑞鶴さんが出てるから嫉妬しちゃって八つ当たりも入ってると思う。加賀さんはとりあえず頭を冷やせばいいと思うよ。

倭は倭で僚艦は優秀な改二ばかりだからきつちりと指示を出せば案外なんとかな

るかもよ？」

加賀「なっ……五航戦の子達となんか一緒にしないで」

そっぽを向くが怒りと照れによりその頬はほのかに赤い。

……加賀さんって意外と感情豊かなんですね。

倭「……単独戦闘殲滅戦をさせてもらえるならこの程度の艦隊を消すことなど造作も無
いんだが。僚艦支援艦隊を使えというのが理解出来ん。おまけに標的艦までついてくるとはな」

加賀「……その口を二度と開かないように縫い付けましょうか？」

服の襟を握り倭を無理やり立たせ壁に押し付ける。

衝撃で椅子が数個ほど吹き飛んだが、壁際の座席だったため被害は無かった。

加賀は表情に乏しい方なのでここまでブチギレること自体が珍しい。加賀と倭、その隣にいた時雨を中心に人の半円ができる。

長門「おい、お前ら。何をやっている！」

長門が人の円を割って入り込む。

加賀「……無礼な発言をした者を問いただしてるだけです」

倭「俺は常識を言ったまでだが。それで急に壁に押し付けられる意味がわからん。時雨が言ってた壁ドンの真似のつもりか？それに先に手を出したのは青白袴の方だろ。

それで俺が悪役にされるのはおかしいだろう」

長門「とりあえず二人とも離れる。ど付き合いをされてもこつちが困る」

時雨「2人ともやめなよ。ほら、離れて」

加賀「……まさかとは思うけど艦隊行動すらできないのかしら？」

時雨が間に割って入り加賀を引き離す。

倭「…残念だが同型艦以外との艦隊行動は想定されていない。主任務が超兵器を消し去ることだし、それが俺の本分だしな。というより、ノロノロ30knot前後で動けと？いくら何でも付き合いきれん」

(※倭の常識がry)

加賀「……いい加減に口を謹んでください。艦としてのいろは、基礎基本の艦隊行動が全くだきないくせに戦艦を、いや艦を名乗らないでください。戦闘イカダとでも名乗ってればいいんですよ」

倭「……せめてマトモな艦載機、具体的に言えばハウニヴーと呼ばれる円盤型の超音速で動き回る戦闘機・攻撃機・爆撃機を足したような物と俺と同等クラスの速力を持っているならその発言はわからなくないが……それすら無い奴がなんと云おうが意味を

成さん。負け犬の遠吠えみたいで無様だぞ」

売り言葉に買い言葉、火に油を注ぐとは正しくこのことか。

加賀の怒りが頂点を突き抜ける。

加賀「……実在しないものを比較に出すなんて猿の方がよほど賢いようね。1回動物園の檻の中に入ってみてはいかがですか？どれだけ貴方が無様かわかるでしょう。不服なら艦隊行動ができるようになってから文句を言つて頂戴。そして私の目の前から消えてください。気持ち悪いです」

倭「まず、艦隊にすら参加しないお前にあれこれ指図される筋合い等全く無い。瑞鶴に言われるならまだ考えなくもないがな。俺とて空母の利用価値はわかつてる。だが、人の考えを頭ごなしに否定する奴は黙って焼き鳥製造機になつてくれ。そもそも話、お前など眼中に無いし視界に入れても認識する必要すら無いからな。そして、実在しないものは比較に出さん。最後に、そこまで言うなら俺は部屋に帰る。時雨、鍵を持ってくぞ」

(※倭の常識が r y)

きつく握りしめていた加賀の手をあつさりとは振りほどく。

お返しと言わんばかりに先程まで食べていた超絶激辛カレー皿を加賀の顔面に叩き

つけて破砕音と共に部屋を出ていく倭。

その足元には金属製の扉がシュレツダーにかけられた紙のように粉碎されていた。

時雨「……はあ……加賀さんごめんね。うちの倭が物凄く失礼な事言っちゃって……」

唇が激辛カレーのせいでパンパンに膨れ上がった加賀に形だけでも謝る。が…

加賀「…つ…辛…逃げ足だけはとことん速いのね…何、貴方の猿なの？猿ぐらいちやんとしつけないよ」

理不尽。いや、腹が煮えたぎっているせいか冷静な判断力を欠いているためか、無関係な時雨にまで怒りの矛先を向けてしまう。

しまった、と違って口を抑えるも出てしまった言葉はもう戻らない。

時雨「何故それを僕に言うんだい？土俵違いにも程があるよ。一応空母だから最低限の礼儀は守ろうと思ったのに、そんな発言するんだ。まだ瑞鶴五航戦のお二方や翔鶴のほうがよくほど礼儀があると思うよ？それとも、勝ち目のない戦艦じゃなくて、勝ち目のある駆逐艦の僕にまで喧嘩を売るってわけ？一航戦ってその程度なんだ。最低だね」

加賀「なつ…ふざけるのも大概にし…」

時雨「へえ。そもそも謝る気すら無いんだね。ふざけてるのはどっちだい？

加賀「……つ。……一回黙らせてあげましょうか！」

時雨「君には失望したよ。謝罪すらもにできないなんて人としても最低だね」

加賀が時雨につかみかろうとしたその時

姉t「…はい、そこまで」

出入口から強烈な覇気とともに部屋の中の空気が凍る。

半円が提督の通り道の部分だけナイフで切り落としたかのように綺麗に割れる。

姉t「加賀、後で執務室に来なさい。それまでにお風呂に入り頭を冷やしておくように。カレー臭いまま来るなんて言語道断よ」

加賀「…時雨の件に関しては完全に私が悪いです。ですが、倭の件に関しては私に非は無いのですが？それでも…」

姉t「いいから来なさい」

加賀「ですが！」

怒りの矛先が提督にまで向く。だが提督は怯まない。

姉t「わかりましたか？」

加賀「…：はい」

先に加賀が折れた。唇を噛み締めてうつむく。床が拳から滴り落ちる血で汚れるぐらい強く握りしめながら。

姉t「わかればよし。時雨、貴女は倭に艦隊行動のいろはを教えてあげなさい。倭の

情けない姿は見たくないでしょう？ 必要ならば私の所まで部屋の鍵なり資材なり何なり遠慮せず取りに来てください。全力でサポートします」

時雨「加賀の件は不服ですが、提督がそう仰るのなら。失礼いたします」

一礼し、割れた道から退室する。

姉t「昼ごはんの時間も終わりね。丁度いいわ、解散とします。以上」

食堂に残った数名の艦娘は散り散りになって流れ解散となった。

机を拭いて明かりの落とし、椅子を上げ火の用心を行う長門と姉提督。

そのふたりの顔はどこか考え事をしているようにも捉えられる。

姉t（面白いわね倭は。演習のプログラムを書き換える必要が出てきたわ。基地航空

隊の編成が必要ね…）

長門（…演習のために基地航空隊の編成と通達を急がせよう）

提督室で同一のことを考えていた事にふたりが腹を抱えて笑ったことは言うまでもないであろう。

—————

in倭と時雨ルーム

時雨「やーまーとー？ふて寝しようとしてるところ悪いけど、僕、怒だからね。だいたい君の速力がおかしいだけだし、加賀さんにそこまで言う筋合いも義理もないし、いくら苦手分野から逃げてても最終的にはそれをやらなければならぬんだから僕が恥をかかない程度にはできるよようにしてよ」

倭「しかし、ああ言われて黙るわけにはいかん」

時雨「……」

時雨が壁を殴る。木材が軋み、へし折れる音と共に壁が円錐形に凹む。

倭「……はあ……」

時雨「わかったら返事は？」

倭「……ん」

時雨「わかってくれればいいよ。早速僕と練習しよ、2人つきりで、」

倭「……は？」

時雨「できないならでできるようになるまで練習すればいいのさ。ほら、演習室行くよ。ちやんとできるようにならなきやダメなもんはダメだからね」

倭（どうしてこうなった……）

ズルズルと時雨に引つ張られて演習室にしばらく籠つてたのは言うまでもない。

——

加賀 side

……やってしまった。

最近の提督からの扱いもあつたけど、怒りで自我を失つていたとはいえ無関係時雨の人に八つ当たりをしてしまった。

……でも、許せない。アイツだけは。

シズメテヤル……シズメてヤ……落ち着け……私……

姉t「……前線要員として使ってくれないからって不貞腐れるのはいいんですけど、いつまで風呂に入ってるんですか？」

慌てて振り返るとバスタオルを体に巻いた凜々しい提督の姿があつた。

加賀「提督、いつからそこに……」

姉t「15分程前かな？とりあえずお風呂に入りながら鼻塩塩」

加賀「……どうぞ」

姉t「どうもです。ちよつと油断して冷えちゃつてさ。つてことでドボーン☆」

天井にまで水しぶきが届くほど豪快に飛び込む。

加賀「……で、話ってなんですか？」

姉t「夜雨から前にちらつと聞いた話だけ……そうね。装甲空母、軽空母を含めた空母全体の弱点はわかるわよね？」

加賀「……夜と運用コスト、小回りの利かなさかしら。潜水艦は軽空母が、直接攻撃は装甲空母が反例になるわね」

姉t「なら、倭や夜雨の世界の空母のことを今から言うからその弱点を予想してみて？えつと、夜間の発着艦は勿論可能で旋回半径は駆逐艦とどっこいどっこい。艦載機はジェット機とその後継機と言ったところかしら。多目的化されていて対潜水艦、対水上、対空攻撃も可能よ」

加賀「……搭載量と運用コスト、超硬目標への攻撃手段でしょうか」

姉t「それをとりあえず夜雨の特徴と当てはめて考えてみればわかるよね？」

加賀「あつ……そういうことだったんですね……」

姉t「そういうことよ。落ち着いて考えればわかるでしょ？」

加賀「はい……」

姉t「空母の利点は臨機応変さだからいつまでも硬いままじゃ、何も出来ないわよ。でも、硬い部分が必要。夜雨や倭でいうなら鋼の鎧と鉄の意思、絆や愛と言ったところかしら」

絆……愛……繋がり

今まで1度もそんな事を考えたことは無かった。

常に一番であり続けなければならないという脅迫にも似たような感情……いや、思考に囚われ続けていた。

……本来私は改長門型戦艦、つまるところの加賀型戦艦として産まれる予定だった。

しかし、軍縮により廃艦……要らない子として一度捨てられた。

天城型航空母艦の天城と同型の赤城さんが空母として改装されるはずだった。

——私も長門さんや天城さんや赤城のように海に出たかった——

そう望んでしまった。

望まなければ……そう……あんな事さえ無ければ。

私の運命と引換に彼女は死んだ。

要らない子のはずの私を支えていたはずの梁から守ってくれた。

私の腕の中で死ぬ間際に残した

「……私の代わりに……日本を……頼み……ま……す……」

という彼女の声が今でもたまに聴こえる。

……責任を負わされたり批判されたりしなければ今の私は心を閉ざさ無かったのかも

しれない。

その時からか、私の周りには誰も居なくなつたのでしたね……

突然柔らかい感触が頭を覆う。

「…貴方は一人で背負い込み過ぎです。たまにはすべて吐き出してみたらどうですか？」

(…赤城さん……?)

確かに声が聞こえたような気がした。

心が揺れる。流されてはダメ……。

「…たまには甘えても良いんですよ？」

(……鳳翔さん……?)

心を揺さぶられる。……流されないように耐えなきや……。

「…たまには休憩も必要ですよね？先輩」

(……翔鶴……?)

両の目が熱い。必死に目を閉じる。だめ……。

「…先輩は無理しすぎよ。たまには休んだら？」

(……瑞鶴……?)

拳を固く握り感情に流されないように耐える。……やめて……。

「…加賀さん、たまには泣いてもいいんですよ？」

皆に優しく頭を撫でられ、抱きしめられる感覚が連鎖する。

感情が止まらなかつた。必死に抑えてもすり抜けるように湧き出てくる。ついに耐えきれなくなり溢れ出す。

私は提督の腕の中ですべてを吐き出した。辛かったこと、嬉しかったこと、悔しかったこと、悲しかったこと……。

……たまにはいいんですよ……？

優しさの海に溺れても……

——

ひとしきりすべてを吐き出した後、私は提督室に呼ばれた。いや、連れてこられたと言った方が正しいかもしれない。

基地航空隊の編成を、とか仰ってましたけど完全に私への勉強会になってますよねこれ……

姉「結果的に一般的な考え方の【戦艦の方が空母よりも弱い】という考え方をひっくり返してもいる。わかりやすく言えば柔よく剛を制すと言ったところかしら」

加賀「何故成立しないのですか……？」

姉「空母側は艦載機が全滅しない前提かつ空母とほぼ同速の戦艦1隻だけを標的にしているからよ。この条件下なら確かに空母の方が強いわ。でも、その条件下では無かつたら、例えば強力な対空砲火を備え、速力が自分の3倍以上で艦載機が全滅する可能性があれば？」

加賀「艦載機をたたき落とされて袋叩きに……っ?!」

姉「気がついたわね。倭の理論も運用コンセプトも間違いでは無い。むしろ被害が1隻だけに集中するから艦隊の穴が開かないというメリットがある。その分リスクも大きいけどね」

加賀「……なるほど」

姉「後で謝つてきなさい。……電話だ、ちよつと失礼しますね。《はいもしもし……はい……ええ、わかった。今許可を出すね?……えつと、はい、だしたよ。また困ったことがあつたらかけてきていいよ……はーい》…時雨ちゃんから演習室の許可クレしてきたつて事は今は控えた方がいいね」

加賀「演習室? 何故……」

姉「どこぞの誰かさんにボロクソ言われたくないから艦隊行動の訓練をしているん

じゃないかしら?」

加賀「……すいませんでした」

コラボ編—04—A 【戦術】

夜雨 side On 防空戦艦夜雨 CIC

夜雨「……本当にうまく行くかどうかは運次第ですが、皆さん頑張りましたよ」

正直作戦が上手くいくかというよりも、通用するかどうかのほうが不安である。事前準備がほとんど無い状態でのぶっつけ本番。

そして基地航空隊からの攻撃が加賀の指揮の下、発生することや初期距離が500kmに伸びた等のルール自体の変更もある。

夜雨（正直、後で怒られそうだな……まあ、やって見るだけやってみますか）

《演習開始十五分前。陣形を変えることと艦載機の発動機を回す事は許可するが、発艦は禁止だ》

夜雨「偵察機と直掩機の発動機を回してください。神電IIは甲板に武装をつけた状態で待機。空母2隻と榛名を中心に輪型陣を減速変更！」

蒼龍「直掩【烈風改】、発動機回せ！」

瑞鳳「【試製景雲改】は発動待機、【彩雲】は発動機を回して！」

レシプロエンジンの回る爆音と共にプロペラが回り始める。
 燻った灯油のような匂いとともにも煤が飛行甲板を流れる。

夜雨「鈴ちゃんすずは副長の代わり頼むね？ 副長は負傷して乗ってないみたい」

鈴奈「……了解……引き受けた……」

榛名、蒼龍、瑞鳳を輪型陣の中心に前に私、左に吹雪、右に皐月、後ろに春雨……二重に取り囲む。

艦隊の要ではなくあえて敵艦隊とガチ当たりする正面を選んだ。

榛名「あの、榛名は大丈夫ですけど夜雨ちゃんは輪型陣の中に居なくて大丈夫ですか？」

夜雨「逆に中だったら射撃中に上部構造物で斜線が切れちゃうから、最外縁部が嬉しいかな」

……そもそも私は敵旗艦の倭を最初から相手するつもりは無い。

直感的に艦隊戦という利点を最大限に生かして頭数判定勝負に持ち込む以外マトモにやり逢える気がしない、と直前で思ったからだ。

夜雨「装備点検及び報告をお願いします」

夕張「装備点検完了、これでバッチリ戦えちゃいます！」

由良「同じく大丈夫です」

阿武隈「あたしもOKです！」

榛名「榛名は大丈夫です」

春雨「大丈夫です、はい」

吹雪「はい、大丈夫です！」

皐月「ボクはOKだよ！」

羽黒「大丈夫です」

熊野「大丈夫ですわ」

蒼龍「艦載機も練度もバツチリです！」

瑞鳳「はい、頑張っちゃいますよ♪」

夜雨「よし、対空対潜防御輪型陣も組めたし……」

他メンツ「あ、潜水艦は居ないですよ」

あ、そう言えばそうでしたね……ついついいつもの癖でやっちゃった……w
潜水艦は演習海域外で通称破壊をしているとか言っていましたね。
夜雨「あはは……w」

—————

《時間だ。演習開始！》

夜雨「さあ、行きますよ。艦首風上へ両舷原速へかんとくいい、とくりかくきゆくじゆうぐー……言いづらいので普通に行きますね。艦隊取り舵95、両舷原速。艦首を風上に向けて」

三つ時の入道雲が浮かんでいる空と青く広い海原のキャンバスに艦首からの白波と航跡^{ウェイキ}で弧を描いて艦隊が方向を変える。

蒼龍「烈風直掩機、発艦！」

瑞鳳「甲板に水をまいてから試製景雲、改—V3、エンジン始動お！【彩雲隊】は発艦して！」

夜雨「神電II発艦せよ。深淵^{アビス}は発艦待機」

矢継ぎ早に飛び立つ艦載機。ジェット機も何とか発艦することができた。第一関門クリアと言ったところか。

空中集合を終えると普通では見られないような——【前列機を盾に後列機がそれを観察する】といった具合の陣形を取り索敵に飛ぶ。

後はうまく機能をしてくれればいいんですけどね…。

—————

夜雨side ロールバック3時間in会議室

蒼龍「え、私は【烈風改】と【震電改】をガン積み？何故ですか？」

瑞鳳「私は2・3スロットに偵察機、後は【震電改】と【烈風改】なんだけど……」
蒼龍瑞鳳「納得出来ないです！」

緑を基調とした2人に詰め寄られる。まあ、そうなりますよね…。

夜雨「とりあえず。なぜ私がそう選んだかなんだけど、これを見て欲しいの」E・艦
対空ミサイル

蒼&瑞「何ですか、それ」

…と、言ったものの正直、かなり説明に困りました。

対空用のロケット砲がたしか存在しましたよね。伊勢型や空母の一部が積んでたはずですし。

夜雨「艦対空ミサイルよ。ほぼ100%命中する長距離対空誘導噴進弾と言えればわかるかしら？」

蒼龍「え、それじゃあ艦爆だろうが艦戦だろうが艦攻だろうが……」

瑞鳳「全部落とされちゃうの？」

二人の顔が一気に暗くなる。でも、そうなってしまいうのも仕方が無い。

元々音よりも早い機体を叩き落とすのに使われているものが高々500km/h
ちよつとの物に衝突命中するなど赤子の手を捻るようなものだ。

…実際赤子の手を捻るのは事後問題的に至難の技ですけどね……。

夜雨「艦戦ならダイブや急旋回で辛うじて振り切れる可能性があるよ。特に末端誘導が赤外線なら、ですけど」

蒼龍「…それじゃなければ？」

夜雨「チャフ、フレアがなければ撃ち落とすしかないわね。それが出来なければ終わり。ただ、それは相手も同じよ。私だって使えるし。なら、数ゴリ押しで制空を取るしかないですね（神電Ⅱと桜花改は残るし……）」

瑞鳳「……ということは、1秒でも長く生き残れ、背後に付かれたら急旋回とダイブ？」

夜雨「そうなりますね。とりあえず生存性を一ミリでも高くする秘密兵器を用意しておきます。あ、一瞬失礼します。内線2番《鈴ちゃんいきなりゴメン、増層式チャフ・フレアディスプレイを航空格納庫に出しといて？後で見に行くから》……これでよし」

蒼龍の顔が一気に明るくなる。だが、瑞鳳の顔は半分明るく半分暗い。いや、困つてるとも取れる。

夜雨「ただ、瑞鳳ちゃんに載せる予定は彩雲と景雲 改、なんだけど…【景雲改】って超が付くほどレアなのかな？私の世界では文字通り 型遅れの初期《ポンコツ》ジェット機扱いだからまだ感覚的には慣れてないのですが……」

瑞鳳「……えっと、私達はそもそも【景雲改】は載せられないです…」

夜雨「へ？」

瑞鳳「飛行甲板が木製なのと重量的に……えっと、こんな感じのスペックで、重量は約9トンなので……。無理矢理発艦はできても着艦フックとかワイヤーが壊れちゃうのよ」

見せてきた航空機カタログパンフレットらしきものに映されていた写真は両翼の下に初期のジェットエンジン「ネ330 ターボジェットエンジン」が1機ずつぶら下げられていた。私達の世界では景雲^{R2Y2}1型と呼ばれる機体だ。

夜雨「……あー、V1型ね。私が言ってるのは……多分そのパンフレットには無いからこっちで出すわね。えっと、R2Y2の……あった。これこれ」

私用の空中投影型ディスプレイに表示された機体は本体にジェットエンジンが搭載され、翼がフリーな景雲^{R2Y2}3型改^Vとよばれるタイプだ「ネ330 ターボジェットエンジン」の改良型が積まれているものさほどスペックは変わらない。MIGの初期ジェットにも似ている形をしている奴がいた。

よく良く見れば武装はV1型もV3型も同じ5式30mm機関砲×4門。だが、帰還時の自重は若干私の方が軽い約7トン。

瑞鳳「ワイヤーを少し強化すれば……行けるかも？」

夜雨「よし、それも申請を出しておくね？後、発艦時に水を巻いて飛行甲板の過熱損

傷を防ぐことを忘れずに、ね」

瑞鳳「やったあ♪」

夜雨「さて、瑞鳳にはこれの使い方も教えないとね。これは後で、ね？

夜雨「んで次はあぶちゃん由良ちゃんメロンちゃんなんだけど、載せ変えるものだけ言うね？ 順番に【甲標的と15・5cm3連と35mmClws+射撃レーダー】・【15・5cm3連2つと35mmClws+射撃レーダー】・【15・5cm3連2つと35mmClws+射撃レーダー】と四連装新型酸素魚雷」ね」

夕張「しりうす……ってなんですか？ 新兵器ですか?!」

夜雨「35mm六砲身バルカン砲、シウスよ。この艦に付いてた白いマイクのようなものに6つの砲身が円状についてたヤツがそれだね。ミサイルとやらも迎撃できる優れ物よ。ちよつと重いけどねw」

夕張、阿武隈、由良がキラキラ戦意高揚状態になりました

夜雨「はぐちゃんは【20・3cm連装3号砲2つと四連装新型酸素魚雷1つ、35mmClws+射撃レーダー】ね」

羽黒「え、あ、……ありがとうございます」

……これで全員キラキラ戦意高揚状態になりましたね。相手も多分キラキラすると思うのでない

よりはマシンですが…。

—————

な—んてことがあったけど、正直気休め程度ですのだから不安です……。

夜雨「…逆探知機に感あり。電探起動、戦艦倭を旗艦とする艦隊を探知。正面約405 km。倭の位置は…探知不能。推定位置で輪型陣最後尾です。景雲改が対空ミサイルの有効射程に入るまで約13分です」

瑞鳳「瑞鳳の景雲改、彩雲に後約5分で指示された行動を取らせませすね？」

夜雨「了解、お願いします。風向きの彩雲は高度3000mまでの降下で大丈夫です」

瑞鳳「了解♪」

夜雨「…：AGS及び63式対艦ミサイル、攻撃用意。目標戦艦倭率いる艦隊の倭以外」

珍三角が首を伸ばし砲身を高々と掲げる。それと同時にVLSの装甲蓋がゆつくりと開く。

倭が探知出来なければそれ以外を探知し、それを攻撃する。艦隊戦ならではの発想と
言うべきかもしれないが戦力をすり減らすという意味では正しいのかもしれない。

夜雨「展開、開放確認良し。弾頭及び誘導装置起動。指示を待て。直掩機は私の直上から退避。発射後、迎撃戦闘機隊を発艦準備させてくれる?」

蒼龍「直掩機隊、戦艦夜雨上空から退避!迎撃戦闘機隊、発艦準備開始!」

瑞鳳「:定時10秒前。: : : :5、4、3、2、1、全機ブレイク!」

凧紗『READY:Open fire!』

夜雨「コール確認。攻撃始め!」

瑞鳳の声に合わせて多目的VLSに装填されていた63式のロケットブースターが一斉に火を噴き、風に吹かれたカーテンの如く煙を撒き散らす。

そこから斜めに投げられた超音速の砲弾。

凧紗『こちらナイトメア。運景雲改V3ちやんが荷物を投下中ね。AGS誘導システム正常動作

確認。中継もOKね。敵編隊は空中集合完了、迂回上昇中。桜花改と深淵の発艦用意を具申』

夜雨「了解、具申は検討しておくね。作戦空域到達まで約5分。目標到達まで約8分。

凧紗、瑞鳳、アレ頼むわよ」

瑞鳳「了解♪全機アレをお願いします!」

凧紗『了解。全機アレを』

: : : :さて、上手くいくでしょうか。

—————
倭side

倭電探妖精「…攻撃隊、空中集合完了。移動開始。敵索敵機、対空ミサイル圏内まで後5分……?!…レーダー部分ロス!」

索敵用突如レーダーに白雲がかかる。

倭「む、なんだ?」

双眼鏡を使わず目をこらすと、型遅れのポンコツジェット機の……Migらしきものが白銀に輝く宣伝ビラを腹の下からばら撒いていた。

太陽光を反射して星のように輝くビラがハッキリとその二つの眼に焼き付く。

倭「なる程。アルミの紙切か。にしてもかなり遠距離でばらまいたな。使える周波帯で索敵せよ」

倭電探妖精「了解!周波帯的に細かい目標は探知できませんが、レシプロ艦載機程度なら大丈夫です」

倭「旧式機だからといって侮れんな。ミサイル射程圏内に入り次第撃ち落とせ」

…なかなかの策士が居るようだ。だが、レーダーよりも目視の方が性能がいいコイツら(艦娘s)にはあまり影響は無さそうだな。

景雲改が翼下にぶら下げていた左右合計4発のロケットを俺らの仕事はこれで終わりと言わんばかりの最後っ屁として放つ。

そしてすぐさま反転、上昇離脱する。

スピードクライム程度の上昇だが、徹底したヒット&アウェイ。

想定されていない敵の行動に戸惑う。

倭「……ポンコツジェットが噴進弾を発射したか。……当たらん。噴進弾は無視して構わん。それよりも後続の偵察機と攻撃隊に注意せよ」

倭電探妖精「敵さん、何がしたいのでしょうか……意図が読めません」

倭「旧式なりの目潰し、だな」

……正直俺も奴が何をしたいかがわからん。

姑息な手でこの俺を欺こうというのか……？

……データでしか見てないが神電Ⅱとやらは驚異的だ。そいつの場所だけでもわかれば。

倭電探妖精「敵噴進弾の一部は誘導式のマジモンです！探針波を傍受！^{パッシブ}受動式ECM起動！^{アクティブ}目標まで約120,000！着弾までおよそ9分！弾速マツハ0.8！推定弾種ハーブーンかトマホーク！」

……ポンコツジェットに紛れて撃ってきたか。

倭「対空ミサイルVLS発射用意！」

轟音とともにVLSの装甲蓋が口を開ける。

倭「先打ちして射程ギリギリでたたき落とす。対空ミサイル、攻撃始め！対空射撃用意！射程に入り次第叩き落とせ！輪型陣最前列に移動して迎撃する。取り舵！」

白煙とともに艦対空ミサイルが獲物を求めて飛び立つ。

だが、迎撃ミサイルの届く前にパラシュートを展開し減速、自由落下が始まるミサイルが出てくる。

本物のミサイルにぶつかり爆発するミサイルと自由落下ロケットを標的としたミサイルの自爆。それとは無関係に黒くなる空。

倭「……嵐になりそうだ」

この時点でまだ倭の乗員は誰も気がついていない。

倭のレーダーが神電Ⅱと夜雨の放った攻撃の一部を捉え切れていないことを。

そして捉えられてないそれがステルス状態でありマツハ3という想定されてない速度であと3分で到達することを。

——

倭見張り妖精「……ん？噴進煙……？て、敵弾至近！対空射撃！」

倭「なっ……レーダー手、何か見えるか？」

あわてて35mmCIWSと40mm機銃が弾幕で数発ほど迎撃するが時既に遅し。急上昇・緩上昇・水平飛行する三つに分かれて分散した弾幕を掻い潜り風切り音と共に最前列の駆逐艦や巡洋艦に着弾し青いペイントで染め上げる。

他の艦も慌てて弾幕を貼るがまるでその行為を嘲笑うかのように次々に轟沈判定が出て脱落していく。

倭電探妖精「?何を言ってるんですか?至近には味方艦しか写ってませ……?」

突然倭を少し揺さぶるほどの振動と金属同士がぶつかり擦れ合う音が響く。

倭「ダメコン。被害状況知らせ!」

倭ダメコン妖精「艦首被弾しかし損害皆無。厳密に言えば艦首甲板が微妙に凹んだだけです」

倭「……ふむ」

時雨『倭、この……ザザ……ま……ジ……ず……ズ……い……ザザ……』

通信機器、レーダー類に突然ノイズが走る。

本能的に超兵器の放つ超兵器ノイズとは別ということを悟る。

倭電探妖精「……?!レーダー完全にロスト!ECCMパッシブからアクティブに切り替え!……ダメです。部分的に移りません!」

倭「む。赤外線は？」

倭電探妖精「問題無しです。なのでそちらと範囲外の電探、目視のみです。かなり索敵力が……」

倭「ちと派手な嵐だな……残存艦は？」

倭見張り妖精「空母1、戦艦1、重巡洋艦1、駆逐艦時雨のみです」

倭「4隻……綺麗に露払いしてくれたか。これで俺の枷は消えた、な」

その瞬間倭のソナーに超小型の潜水艦（甲標的）が写りそこから放たれた魚雷が時雨以外3隻に魚雷命中の轟沈判定が出た。

—————

夜雨 side

時間はレーダージャミングを掛けた時まで遡る。

夜雨「……金属片散布を確認。春雨および自艦は超重力電磁防壁展開！陣形変更。航空母艦は直掩機と駆逐艦、阿武隈以外の軽巡洋艦を付けて退避して！その後先頭以外単縦陣形！私と春雨は複縦陣に組み直すよ！第一時迎撃隊は回頭後直ちに発艦せよ！」

蒼龍&瑞鳳「了解！」

瑞鳳、蒼龍、阿武隈、吹雪他が離脱し防壁持ちが先頭に立ち飛んでくる砲弾を無効化し確実に射程圏内まで滑り込む。それ以外にも手段はあるが確実に……。

私と春雨が横並びになりその後には榛名、羽黒、熊野、阿武隈と続く。

夜雨「……変更完了を確認。ECM開始！電波攻撃 凧紗、あとは任せたよ！」

凧紗『了解！引き継ぎ完了。命中まで1分。』

超強力かつ意味の無いデタラメなパルス信号の妨害電波を倭目掛けて浴びせる。

電子機器を完全に黙らせるほど強くないが艦隊内無線やミサイルの誘導電波を無力化する程度には強力なので非力な通信装置しか持たない艦娘や烈風・景雲改などの艦載機からの電波も当然送受信できない。

そこで、艦娘機と比較して強力な送受信ができる神電IIを中継機としてつつつ行動することによって安定したチームプレイができるようにしたうえで我々の側面から攻撃をしようとする移動中の開幕航空攻撃隊の迎撃をする。

景雲改は30m機関砲×4門という偵察機にしては頭のネジが数本吹き飛んでいける程の破格の火力と割と初期型だが一応の噴進エンジンを持っている。

烈風や紫電改二ではダイブ速度に追従できず、震電では小回りが足りない。徹底的な一撃離脱をすればまず負けることはない。

ヘッドオン勝負になると爆発的火力で敵を撃ち、防弾ガラスと防弾装甲で被害を減らす。

旋回戦には一切付き合わず失速スレスレまで上昇し失速して錐揉み状態になった敵機目かけて急降下をする。

エネルギー戦闘で優位に立ち優位な位置からペイント弾幕を浴びせられると最高練度の妖精さんもたまったものではない。

そこに遅れてきた迎撃隊の震電改と烈風改が加わり艦載機の数ですり潰す。

だが、制空権は完全に互角状態。次々とペイントまみれの機が基地に帰投していく。頃合いを見て待ってましたと阿武隈から発進した水面下の甲標的部隊に合図を送る。

そろそろ景雲改が放った無誘導ロケットが着水、ソノブイモードに切り替わり「アンテナ」と「ノイズ」をばらまいているだろう。

ロケットソノブイはサイズが大きい分、景雲改に数を載せれない。雑音が酷い甲標的の目隠しには少し心もとないが、海がそこそこ荒れているため問題は無いだろう。

ゆっくりと雷撃位置まで移動。

(と、言っても甲標的からすればほぼ全速力だが)

風紗『砲弾命中まで…5…4…3…弾着…今！』

AGSとミサイルの雨が降り注ぎ、敵艦隊を構成している艦が数隻撃沈判定を貰う。作戦は今のところ上手くいっているみたいだ。

風紗『砲弾直撃。残存艦4〜6程度。現在確認中！』

夜雨「了解。…少し海が荒れてきましたね。艦橋見張り妖精さん、雨が降ってきたらちやんとカツパ着てくださいね」

艦橋見張り妖精s「了解」

波が高くなり甲板に海水が被る船が出てくる。

夜雨（…一雨、来そうね…）

風紗『…甲標的の攻撃により倭と時雨以外の撃沈判定を確認』

夜雨「了解。艦載機はスコール域及び交戦海域より全速離脱せよ。その後帰還はせず超燃費飛行で基地航空隊を迎え撃ちましょう。倭からは1センチでも遠くに逃げてください。甲標的は機銃か何かで破壊されると思うので回収は不可能になります…基地航空隊、距離390。左舷。高度4500。景雲改はこれの迎撃に当たってください」

阿武隈「…つ…ごめんね…甲標的の妖精さん…全機離脱してください…！」

夜雨「運良く判定が出てなければ後で回収しましょう」

羽黒「…直掩機も戻してあげてください…これ以上荒れると着艦出来ません」

夜雨「了解。直掩機を帰投させよ。艦隊取り舵55！」

春雨「艦隊とーりかーじ！55！」

荒れてきた風に揉まれても隊を乱すことなく回り全速力で離脱する烈風改、震電改、

彩雲。景雲改はスピードクラ임で高度をあげつつ速度を稼ぐ。

夜雨「魚雷持ちは回頭中に置き魚雷発射！」

春雨「了解、置き魚雷、撃ちます！」

阿武隈「やる時はやるんだから！」

羽黒「行きます……！」

彼女達の魚雷は速力を極限まで落とす代わりに長距離を長時間にわたってソソソ進むように設定されている。

……海が荒れているのでマトモに真っ直ぐ進むことはまず無い。そもそも当てることを目的としない魚雷だから問題は無いが。

夜雨「左舷対空戦闘用意！対空ミサイル発射用意。目標は基地航空隊。指示があるま

で発射は待つてください……あ、雨……」

突如土砂降りの雨が艦隊を纏う。

コラボ編—05—A【4人】

加賀 side タイムロールバック 夜雨と倭交戦開始直前

滑走路とその脇の待機所に双発機と単発機、そして4発機がズラリと並んでレシプロ機関の爆音と共にプロペラを回している。

基地数は分散配置ながらも通常の鎮守府の倍以上は軽くある。

1 基地に対して滑走路は二本。一本に対して2機つつ交互にが横並びに……つまり4列縦隊でまだかまだかとアイドリングしている。

その後が続けとばかりに僚機がタキシングしている。

普通時や出撃時にすらここここまで出したことはないと言うぐらい勢揃いした航空機
……

〈加賀航空隊〉

【戦闘機】

烈風改 (A7M2) 46機

【軽爆撃機／軽攻撃機】

流星改 (B7A2) 20機

彗星(江草隊) (D4Y2) 20機

【偵察機】

彩雲 (C6N1) 12機

↳ 赤城航空隊↳

【戦闘機】

烈風改 (A7M2) 32機

【軽攻撃機／軽爆撃機】

流星改 (B7A2) 20機

彗星 (601空) (D4Y2) 20機

【偵察機】

彩雲 (C6N1) 10機

↳ 基地航空隊↳

(機種区分 愛称 記号 合計機 (夜雨機／倭機))

【戦闘機】

一式戦闘機 隼 (ki-43) 18 (9/9)

二式戦闘機 鍾馗 (ki-44) 18 (9/9)

三式戦闘機 飛燕 (ki-61) 18 (9/9)

四式戦闘機 疾風 (ki-84) 18 (9/9)

五式戦闘機 飛燕改 (ki-100) 18 (9/9)

【急降下爆撃機／攻撃機】

彗星二一甲 D4Y2-2 1 18機 (9/9)

流星改 B7A2 18機 (9/9)

天山 (九三二空) B6N 18機 (9/9)

流星改 (六〇一空) B7A2 18機 (9/9)

彗星 (江草隊) D4Y2 18機 (9/9)

試製南山 M6A1-K 18機 (9/9)

【重爆撃機／重雷撃機】

(機種区分) 愛称 合計機 (夜雨機／倭機)

一式陸攻 34型 18 (9/9)

一式陸攻 (中野隊) 18 (9/9)

一式陸攻	22型甲	18(9/9)
銀河	1	18(9/9)

ざっと見渡すだけでこれぐらいか。イベント時よりも大量の艦載機を投入する異常事態と言つても過言ではない。通常、これだけ大量の艦載機を艦娘のみで管制することは不可能である。

だが、管制補佐をして貰えれば一応は可能だ。

加賀「…演習開始時刻です。陸上機は全機発進。加賀航空隊全機発艦。空中集合せよ」

赤城「了解、第一次攻撃隊、発進始めっ！」

大量の模擬爆弾、模擬魚雷を積んだ機体をレシプロ機関が黒色排煙をあげて前に押し進める。

管制塔『……次、一番滑走路の一式陸攻、2番滑走路の隼隊。3番滑走路の鍾馗。以上は発進せよ』

加賀「……先行偵察機より。海面付近は向かい風1m/s、上空は追い風3m/s。天候は曇り、所によりスコール。視界良好。入道雲あり。以上。それなりに期待はして

いるわ」

管制塔『陸攻機は発進後高度2500まで上昇、戦闘機隊は指定の高度で空中集合せよ』

一式陸攻隊長『P o Wのようには行かないと思う。が、練度MAX(《)の実力を見せ付けてやるぜ。野郎共、行くぞ!』

一式陸戦隼く加藤隊く加藤隼隊、全機発進。先行機に注意しながら高度1000まで上昇し空中集合。くれぐれも内線周波数を間違えるなよ』

三式戦飛飛燕『コンタタック!!全機発進。集合は高度3000!行くぞお前ら!』

五式戦闘機妖精『五式戦、順次発進せよ。高度2000で空中集合、その後編隊上昇をする。以上!私について来いっ!』

30分足らずで停止状態での発艦から空中集合を完了させた一航戦の航空隊はそれぞれの目標に向かって舵を切る。

加賀「……全機発艦及び空中集合完了。見敵必殺、鎧袖一触よ……心配入らないわ倭……私が目の敵の夜雨を……」

赤城「全機発艦及び空中集合完了!……って、加賀さん?顔赤いですが……」

加賀「……なんでもないわ……索敵機、夜雨を見つけ次第報告せよ。以上」

加賀（……私らしくないわ……倭の事ばかり………何故………いえ、今は集中……）
赤城「索敵機、倭を発見次第報告後、即時離脱せよ！」

赤城（いつもの加賀さんらしく無いわ………何処か心ここに在らずと言うべきかしら）

in 通信室 姉提督 side

以前はダンボール箱や埃まみれの機材が多かったこの部屋も龍奈以下数名の手によって機材の動作は良好、床もピカピカに磨かれて綺麗にワックス掛けされている。

椅子と大型モニター、そしてスピーカーなどの制御装置等のせいで若干部屋が狭くなったが10人程度は部屋に入るのであろう。

練度は充分、気合いは十二分で基地と赤城加賀が送り出したのを確認後、通信機械の「受信のみボタン」通称「受」を押しっぱなしホールドにして妖精や艦娘達のやり取りを横流しに聞いていた。

が、私の思った通り………いえ、案の定と言うべきですかね。

航空隊の出鼻は速攻挫かれ砕かれました。

まず偵察機が『目視』で双方を発見したこと。

最新の電子機器の「索敵用電探」ですら双方の旗艦、それも戦艦級のデカブツを捕えられないという事実で整備士と管制の面子を丸潰しにした。

実際には倭は特殊な電波吸収塗料で吸収を、夜雨は電磁防壁で吸収、解読しても無意味な電波を適当にバラマキまくっているのでポンコツ電探程度では機能しない。

まあ、当たり前といえば当たり前前の事として処理。

更に発見の報告途中での電波妨害からの即時撃墜判定。

敵の目を潰す。戦争の基本中の基本、当たり前前の行動ね。

艦戦をその空域に向かわせたものの最新鋭噴式エンジン機による不意打ち噴式強襲により艦戦は壊滅、残存の攻撃機も嵐と迎撃機による妨害でまともに近づけずにいた。

秋月型やアイオワの対空能力ですら遥かに凌駕する量の航空機数で強襲をかけようとしているのに。

管制『何？少数の空母艦載機如きに何を手こずっておる！』

烈風改『…ザザ……相手がおかしい…ガガ…で……ジジ…す…』

五式戦『……ガガ……クソ……ジジ……追いつけね……ガガ……ピー……ザザ』

一式陸攻『…護衛機は良くやっています。ただ、……ガガ……根本的に奴らの戦い方が

変なんです。…ピー…得体の知れないエンジンで飛翔し、探信波を放ち…ザザ…そして何より、相手の速度が速すぎま…ジ…す。烈風改や五式戦ですら振り切られる速度です…ジ…』

管制『…倭への攻撃隊の方はどうだ？…おい、応答せよ！こちら管制塔、応答せよ！…クソッ…』

銀河『…我高高度より報告、倭への攻撃隊は壊滅。繰り返す。倭への攻撃隊は壊滅、我ら銀河隊も撃墜判定』

管制『なん…だと…夜雨攻撃隊は?!』

「あーあ、基地航空隊が壊滅…か。やつぱりというか予想通りというか…反応に困るわね。正直大艦巨砲主義の塊と思っていたけど、流星『やまと』の名を持つだけあるわね。運用次第ではお化け性能になるわね」

弟t「お化け性能どころか公式チート確定じゃね？つーか、アウトレンジ砲戦距離に持ち込んで夜雨はジ・エンド。倭の勝ち確じゃねえか」

「…それよりも基地航空隊の妖精ちゃんは可哀想ね。プライドもクソも木っ端微塵に粉碎されて再起不能にならなければ良いんだけど。ま、その時は1から風紗と倭の晴嵐

妖精に教官をしてもらって鍛え直せばいいだけ、か。それよりもこの嵐大丈夫かしら。鎮守府付近は曇ってる程度だから何とかかなりそうだけど」

鹿島「提督さん、コーヒーと紅茶、そして天気関連の書類をお持ちしました。姉提督さんの方がブラックで、弟提督さんのがストレートテイのお砂糖多めでしたよね。どうぞ」

「ありがとう、頂くわ」

弟「ども。いつも助かる」

鹿島「それにしても酷い嵐みたいですね、提督さん」

「うーん……衛星写真を見る限りだと台風と言うより乱気流……かしら？そのへんは詳しくないからわからないんだけどね」

弟「雲も渦を巻いてないからスポット低気圧といえば良いのかな」伊達メガネキリッ↑お前は理系男子かよ?!

鹿島「提督さん、絶望的にダサいです……」。

弟「すまん、大分調子に乗った」

鹿島「はあ……随伴艦……特に駆逐艦が友鶴しなければ良いのですが……」
「それを言うなら第四艦隊事件の方かしらね」

説明しよう。友鶴事件ともづるじけんは、昭和9年1934年3月12日に行われた水雷戦隊の夜間演習中に佐世保港外で起きた大日本帝國海軍の千鳥型水雷艇3番艦「友鶴」の転覆事故、及びその後の事故原因究明作業を通して明らかになった艦艇の設計理念上の重大な不備のことである。

第四艦隊事件だいよんかんたいじけんは、昭和10年1935年に台風により大日本帝國海軍の艦艇が被った大規模海難事故である。

これにより、艦体の強度や設計に問題があることが判明し、前年に発生した上記の友鶴事件と共に、後の海軍艦艇の設計に大きな影響を与えた。

(Wikipediaより，友鶴事件，および，第四艦隊事件，の記事より一部を改変して引用)

つまり、この二つの事件で転覆耐性や本体強度の増強などが施されたということになる。

「…解説さん補足ありがとう。とにかく嵐が酷くなるようなら最悪中止も検討しなければなりませんね」

弟t「とりあえずそろそろ撃墜判定機、轟沈判定艦娘が戻ってくる時間だな。」

鹿島「私は夕張と妖精さん達と一緒にペンキ落としついでに色々調べてみますね」

「お願いするわ」

鹿島「了解ですっ」

窓から飛び降りて波止場へと駆けていく鹿島。

既に夕張と明石が待機しているのを見てショートカットしたようだ。

一応着地位置を確認してから部屋のモニターを見つつ海図を見ている人の向かいの椅子に座る。

「…で、アンタいつまでそこに居るのかしら。えつと…工廠のお兄貴さん？」

工廠作業員「よう。色々のぞかせてもらってるぐらいの感覚だ。終わるまでかな」

「黒龍のフィギアとその鈴で隠れても丸わかりよ。むしろ気が付かない方がどうかと思うわ。手のひらサイズ…：いえ、小さめのぬいぐるみサイズですし」

弟t「おいおい、本編まで殴り込みかよ」

工廠作業員「まあまあ、こまけえこたあいいんだよ。俺は倭の様子を見にただけだ」
「あら。そこまで心配しなくてもいいんじゃないかしら。そちらの本編で夜雨を文字通りこてんぱんにしてたようだけど？」

工廠作業員「しーっ!!こっちでそれは言わないでくれ。身分隠して変装してんだよ

！」

「あらごめんなさい。メタでしたか？」

工場作業員「……はあ。……で、覚悟が足らずに勝手に油断して沈んだ判定が出ただけだが何か問題でもあるか？」

「私がどうこう言える立場じゃないわよ。で、アンタから見る倭の調子は？」

工場作業員「随伴が消えて嬉々としてるだろうな。多分元からやる気なんて無いだろうな」

「なるほど。……スタビライザーがあってもこの嵐じやまともに動けないかと思えます……夜雨のはかなり強力なやつ……というか、この嵐ですら安定しているので頭おかしい性能かも……?ですが」

工場作業員「どちらにせよ随伴艦を退避させないと嵐的に不味いかもな。そうなると夜雨は負けが確……」

「……お言葉ですが、何事においても100%は有り得ないです。勝負つてのは終わってみなきやわからない物ですよ？」

工場作業員「……殴り倒す手段はいろいろあるんだけどね」

「そもそも殴り倒す気は夜雨に無いんじゃないかしら。S殲滅勝利勝利ではなくB戦術的勝利勝利を狙っての行動かと。それにしても倭の対空射撃のバラケ具合は酷すぎね。カタログスペック

出てないんじゃないかしら」

工場作業員「ま、本人に『やる気があれば』の話だ。所詮カタログスペックは推定データでしかない。実戦に出ればスペックもある程度の誤差は出るもんだ。それに言ったろ？今回もやる気なんて無いって。」

「そう言えばこう仰っていましたね。『超兵器技術により損耗しないから砲身は1度も変えてない』と。どんな素材かメッキか技術か私は知りませんが、海水や湿り気、自重などによって物体は必ず僅かながら劣化、風化を起こします。調整で誤魔化すことは出来まずけどね」

工場作業員「……ほう」

「カタログスペックでは最大射程付近での命中精度は9割程度と倭から伺っています。が、対空射撃標的物に『直撃』として命中しているのは8割程度。百戦錬磨の戦艦ですから海の荒れなど想定外の範囲でしょう。ですが、己の武器の手入れを怠っているようですよ」

工場作業員「だから言ってるだろ？やる殺る気がないんだと」(倭は自分基準のやり方で点検整備するからなあ……点検しない週に演習するんだし仕方ないねえ……)

姉t(龍奈ちゃんが作った点検マニュアルとその基準がおかしいだけですけどね……)

約2週間に1回程度全てのエンジンを止めて分解整備、週1で砲と装甲板分解整備、3日に1度高角砲と機銃の分解整備、毎日目視と疲労度点検って、どれだけマメ好きなんだか。艤装側もほぼ毎日磨いたり調整したりしてるし……)

夜雨side

「主砲射程圏まで後5分。対空砲撃戦闘用意!」

鈴奈「……対空砲撃戦闘……よーい……右舷前……及び左舷前……」

風紗『攻撃機20±5、急降下爆撃機15±5、重爆撃機18±2、護衛戦闘機0。偵察機は撃墜済みだよ』

倭と私の中間付近を円軌道で巡る神電IIから倭と攻撃隊の逐次情報が入ってくる。

「了解、2.3番主砲、目標右舷攻撃機隊、弾種演習用対空気化榴弾。AGS目標左舷急降下爆撃機隊、弾種対空榴弾。高角速射砲統率射撃モードで待機、CIWS自由射撃よし。」

電探妖精「目標、主砲及びAGS射程内!」

「撃ち方はじめーっ!」

鈴奈「……撃ち方……はじめ……」

嵐の荒れた気流をもともせず果敢に突っ込んできた流星改の先頭集団4機を1発

の主砲弾の炸裂で刈り取……ペイントの塊にし、砲弾片（ペイント）で翼をずたずた……ペイントまみれにする。

それに追従する流星改も後発の主砲弾の爆風やペイントの煽りを受けてまとめて墜判定。

続いてAGSから撃ち出された演習用対空榴弾が黒い空を青色に染め上げる。

電探妖精「雲上7500〜8500に重爆隊を確認、方位正面、機数36。9機編隊×3、速度390〜410。下から陸攻、陸攻、銀河。続いて海面スレスレ、方位真後ろ機数9、陸攻雷撃隊！」

「前部主砲急速上げ角！後部4.5.6番主砲、撃ち抜いて！回避予備動作、艦隊面舵5！波に注意して追従してください。第4戦速！」

本来陸上攻撃機、そして中型機は運動性はさほど良くない。その中でも比較的良好な運動性を持つ一式陸攻だが、超低空で一直線に飛行している状態……

つまり、回避機動や回避行動を取らずに接近してくるだけの弾をぶつけるのは夜雨はもちろん、倭ですら文字通り『寝起きでも当たり前にできる』。

45度を超えて突き上げられた主砲から高高度（夜雨、倭基準なら中高度）目掛けて放たれ花を咲かせる無数のペイント爆炎が巡航飛行中の銀河隊を、水平に掲げられた主

砲から4発のペイント爆炎球と2本の薄紅色の光線が陸攻雷撃隊をあつさりと包み込み、ピンクや赤や青や緑等のファンシーカラーな機体が炸裂煙幕から出てきた。

電探妖精「全機撃破、撃墜確認。第2波攻撃隊を確認。右舷水面スレスレ！推定50機程度！後続の榛名が三式弾で応戦中！」

「了解で」

龍奈「右舷速射高角砲、C I W S 目標追従、射撃用意ですね」

機械音と圧縮空気音と共に龍奈がC I Cに入ってきた。

鈴奈「……何で……龍奈が……居るの……」キッ

龍奈「そこが暇だ暇だってうるさいから報告に来ました。ところで調子は？」

「まあまああって所ね。というか、アイツらオート射撃（無人砲塔的な意味で）だから五月蠅いほど暇って言えないんじゃないですか？」

龍奈「装填も自動ですので機械が喋ったんじゃないですか？」（意識↓暇。なんか仕事ブリーズ！）

鈴奈「……」キッ

「こら、鈴奈。今は身内で揉めてる場合じゃないでしょ」

鈴奈「……」（・・・）シユン

叱られた子猫のようにしゅんとなる鈴奈。あーもー可愛い。そしていつも通……相

変わらず龍奈は素直じゃない。なんというか、ツンデレ……？

艦橋見張り妖精「艦橋よりCIC、目視で確認出来ず」

「了解、高角速射砲とCIWSの弾幕射撃にて歓迎射撃、開始」

右舷の広角速射砲&CIWS《航空機絶対殺すマン》が各個目標を合わせて空を睨んでいた砲身から矢次早に砲弾が指定の場所まで飛ばされて炸裂していく。

大和型や秋月型、そして倭よりも濃い弾幕を形成し、模型を超絶テキトウに塗装する感覚でペイントまみれにしていく。

あつという間に全機撃墜判定により全機すごすごと基地に飛んで帰っていく。

龍奈「なんというか、呆気ないですね。レシプロ機如き私の敵ではありません。ジェット機に乗って出直してきてほしいです」

「油断は大敵ってよく言います。気を引き締めて行きましょう。……正直、この嵐の中に隊列を組んで突っ込んでくれるだけの腕の編隊を組める攻撃機乗りはこっちの世界でも滅多にいませんので腕は確かですよ」

龍奈「腕が良くても攻撃できなければ大したことないって判断されるのが結果ですよ。それとも乗ってる機体が悪かったとでも言いたいんですか？」

「違います。というよりも、龍奈ちゃん。ちよつと貴方さつきから言動にトゲがあるけ

ど熱でもあるのかしら？」

龍奈「はい？何のことです？正しい事を言っただけですけど？」

「はあ……あのさあ……」

龍奈「何ですか？言いたい事があるならばつきり言って下さい」

「……？」（倭の方をずっと見てる……気になるのかな……？）

龍奈「なんですの？」

「……いえ。もうすこし見た目をちゃんとして欲しいのと、今日の龍奈ちゃんは少し変だなくって思ってるだけです。あまり気にしないでください」